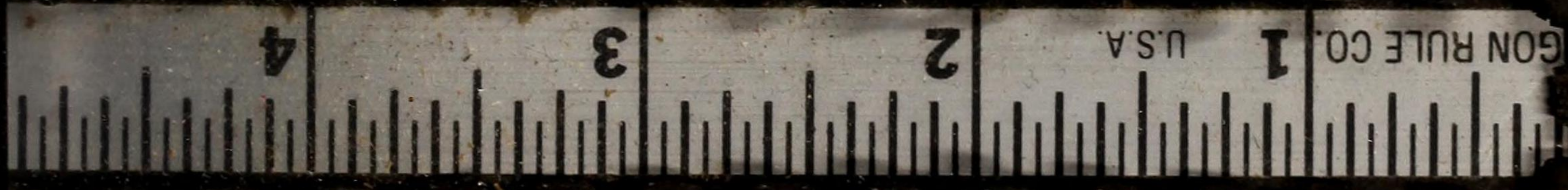
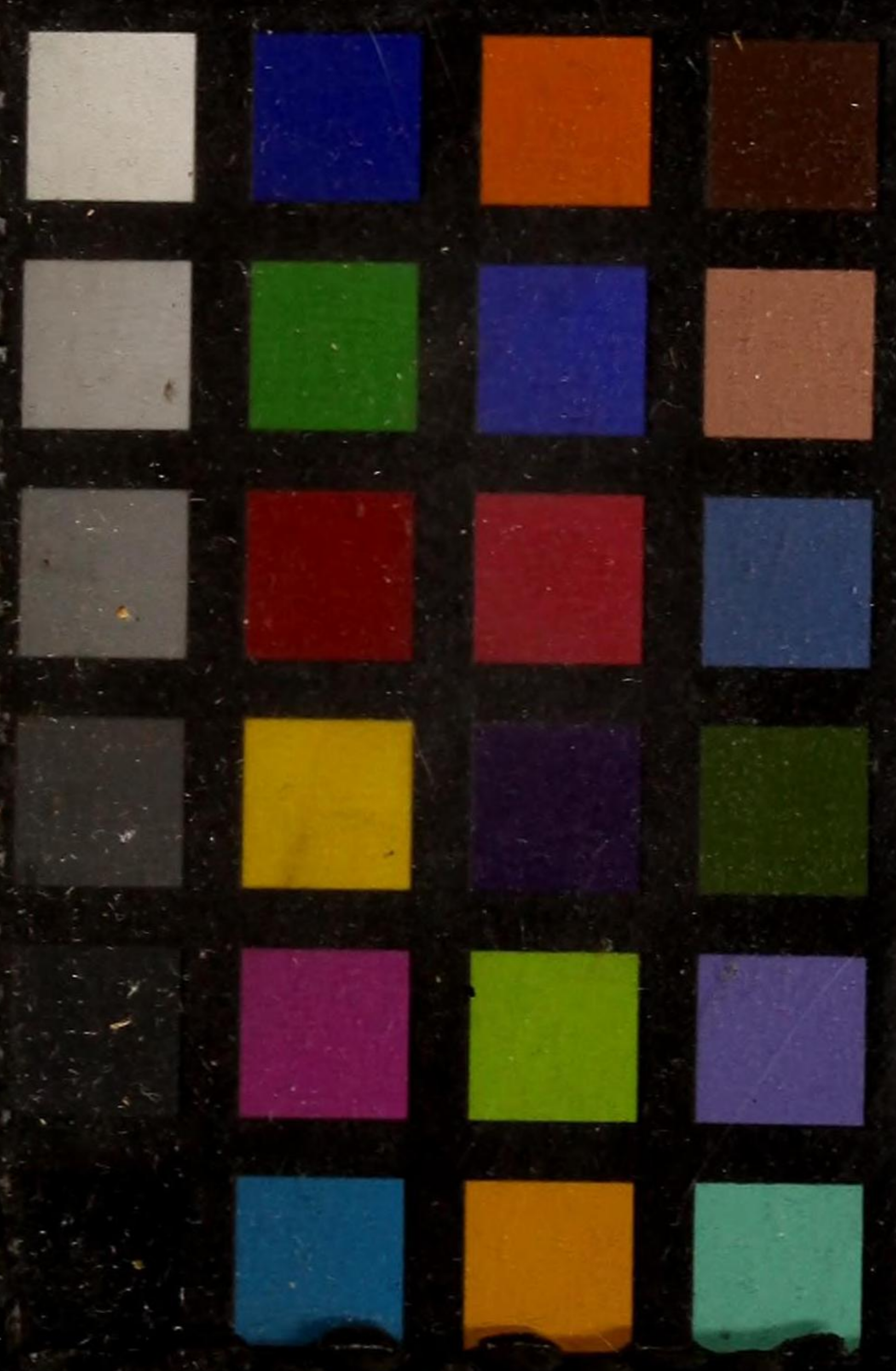


Handwritten text on the left edge of the page, including the word "Ammonia" and other illegible characters.



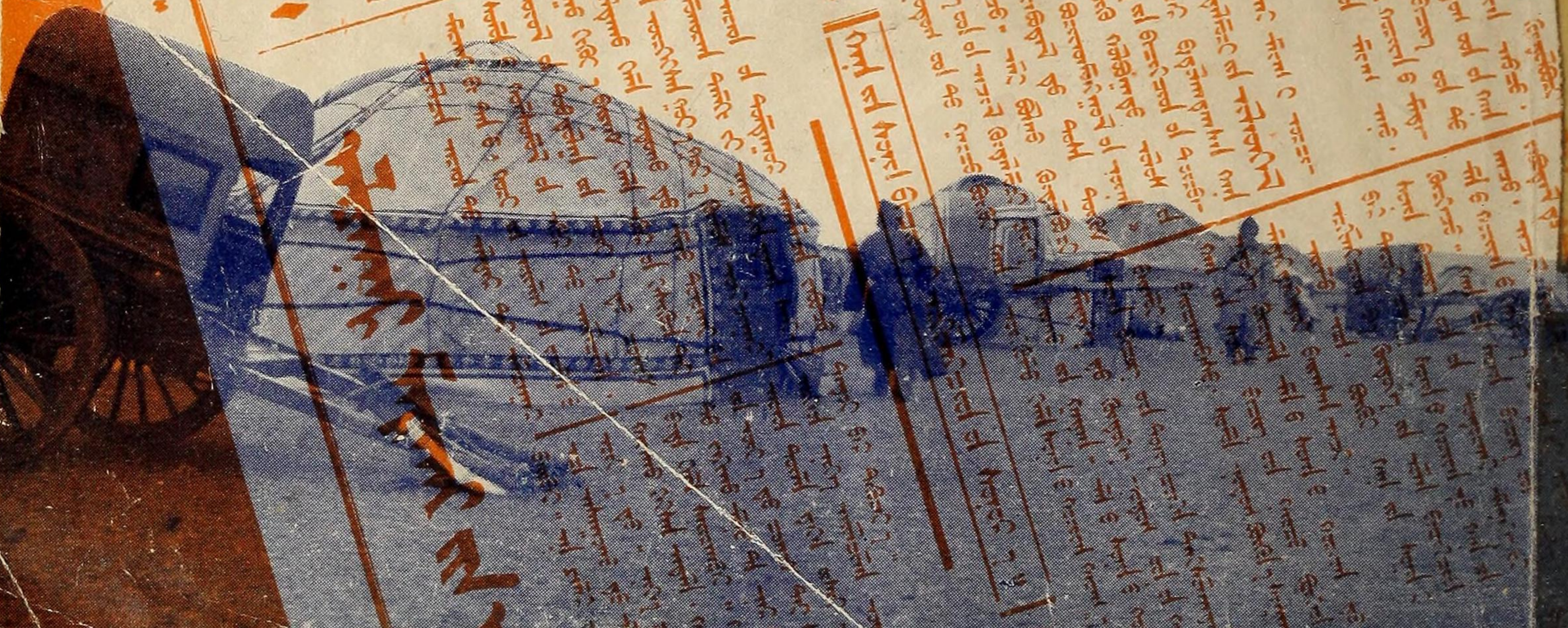
290
150

蒙古とはなにか慶久

財團法人 善隣協會

2625

1914年11月14日



80-810751

Moko to wa donna tokoro ka

善隣叢書第一卷

蒙古とはどんな處か

財團法人 善隣協會

DS793

M7 M57646

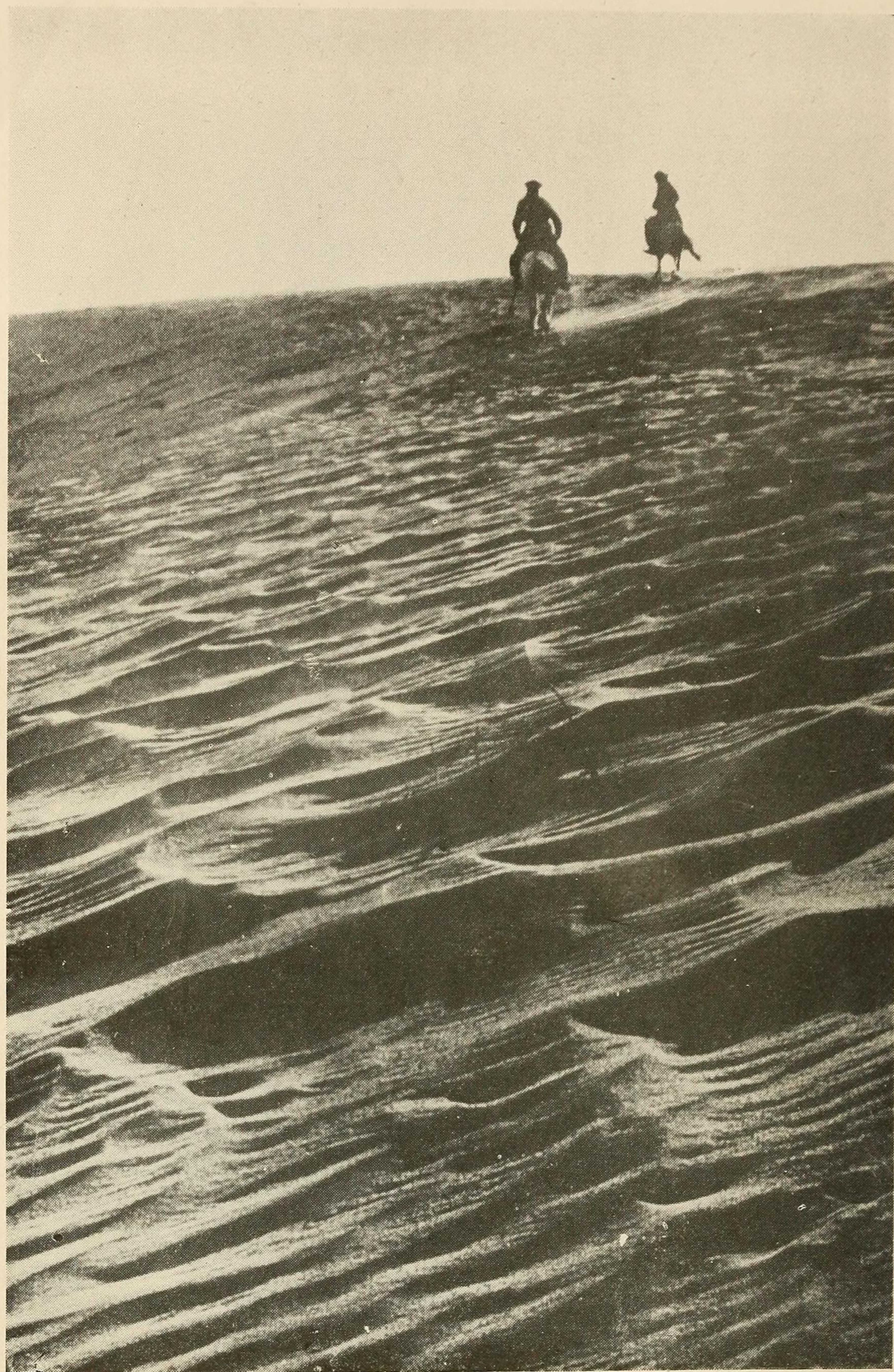
1934

Asian

copy 2

Japan

Case



か 砂 か 波



人 婦 の 古 蒙

第 四 十 一 号

蒙古とはどんな處か？

目次

| | |
|-------------------|---|
| はしがき——蒙古は蒙古の物差で測れ | 一 |
| 第一章 蒙古と萬里長城 | 一 |
| 第二章 地域と地勢 | 三 |
| 第三章 沿革の概要 | 四 |
| 第一節 明朝以前 | 四 |
| 第二節 清朝時代 | 六 |
| 第三節 清朝末期露國の侵略時代 | 八 |
| 第四節 支那革命時代 | 二 |
| 第五節 露國革命以後 | 四 |

第四章 生業と資源……………一八

第五章 ~~8~~ 蒙古の喇嘛か、喇嘛の蒙古か……………二七

第六章 原始的なる其の民情……………三一

第一節 乘馬は巧妙……………三三

第二節 家畜を愛する……………三四

第三節 喇嘛廟を大切にす……………三五

第四節 ~~✓~~ オボを崇拜する……………三七

第五節 王侯を尊敬する……………三八

第六節 畜犬を愛する……………四二

第七節 魚を食はず、豚を養はぬ……………四二

第八節 土地を掘りかへさぬ……………四三

第九節 商人を敵視する……………四四

第十節 草を刈らぬ……………四五

第十一節 猜疑心が強い……………四六

380

| | | |
|------|---------------|----|
| 第十二節 | 水を大切にする…………… | 四八 |
| 第十三節 | 数理觀念に乏しい…………… | 四九 |
| 第十四節 | 日本人に似た性格…………… | 五一 |

第七章 ²外蒙の現状…………… 五二

| | | |
|-----|--------------------|----|
| 第一節 | 外蒙共和國政府の現状…………… | 五二 |
| 第二節 | 教 育…………… | 五五 |
| 第三節 | 交 通…………… | 五六 |
| 第四節 | 軍 備…………… | 五七 |
| 第五節 | 金 融…………… | 五九 |
| 第六節 | 鎖國せる外蒙と其の對日態度…………… | 六一 |

むすび ²⁰善隣協會の意義と目的…………… 六四

(大 尾)

蒙古とはどんな處か？

—はしがき—

蒙古は蒙古の物差で測れ

喇嘛教の教と大自然の恵とによつて廣漠無限の原野の上に原始時代其の儘の生活に甘んじてゐる蒙古人の心情を、時代の尖端を行く文明人を見た眼で、考へた心で、直ちに判断するのは恰も液體を物差で測るに均しく、其の真相を得る事は到底不可能である。此れが爲には蒙古の地理、歴史、生活、人情、風俗を基礎とした着意即ち眞の蒙古の物差が必要であつて、又局部を見て全般を論じ要點に觸れずして結論を下さん

とする事も愚の極である。本篇は上述の信念に基いた研究の一端であるから、趣味本意の巷間常套の賣本と其の轍を異にする點を先づ告白して叱正を乞ふ。

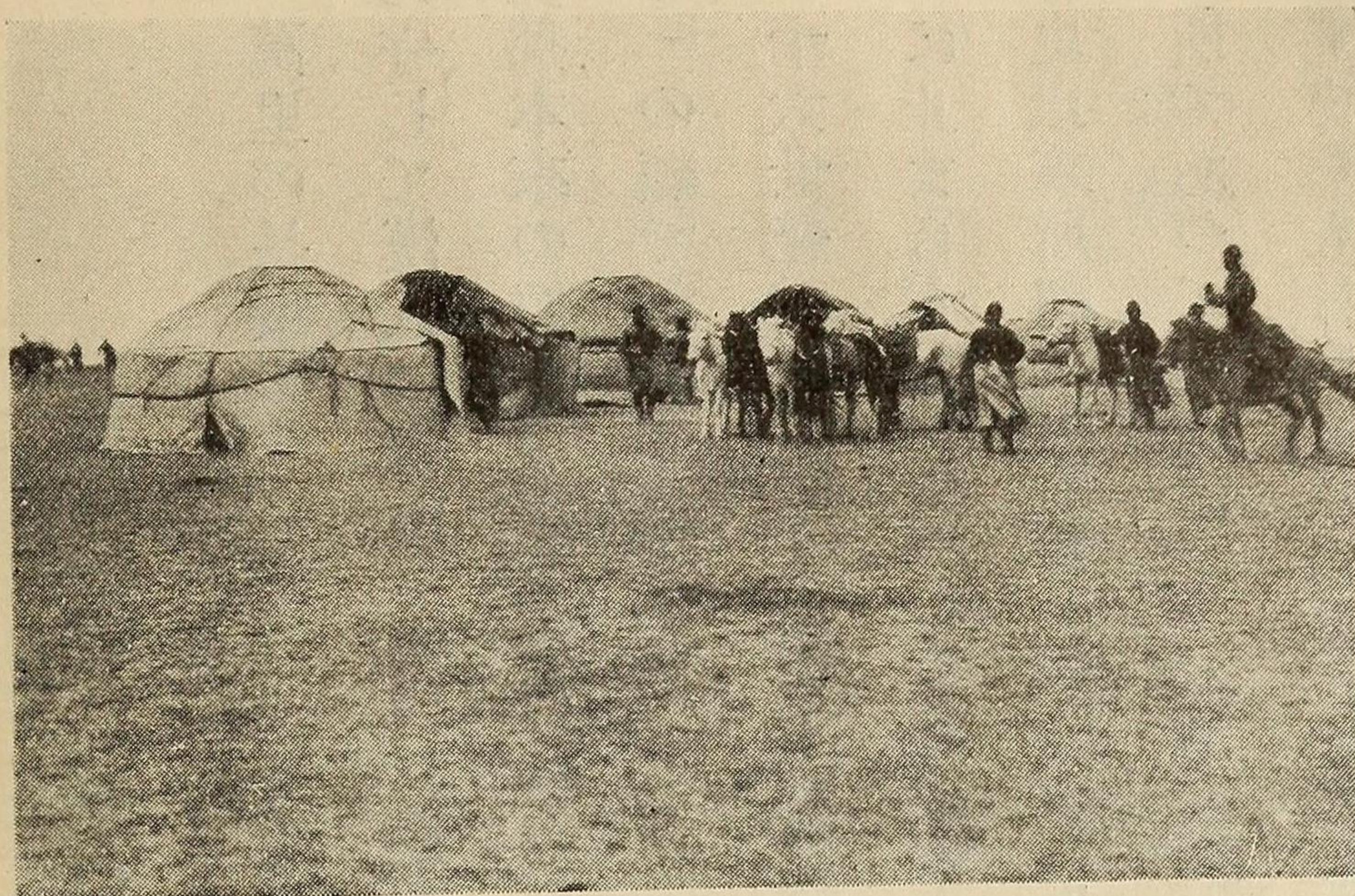
昭和九年一月

第一章 蒙古と萬里長城

萬里の長城以北は蒙古民族祖先の墳墓の地であり、歴代蒙古民族が能く此の故地を死守して漢人に譲らなかつた血戦苦闘の天地である。此の萬里の長城以北を以て漢人支那本來の領土であるかの如くに宣傳して居るのは明らかに「居候主人になりすまし」の類である。

十六世紀即ち明朝末期以前の蒙古民族が勇猛慍悍、萬里の長城以北に獨立健在したるに止まらず、常に進んで支那本土を侵略し、終始漢民族を壓迫して居つた事は漢民族有史以來所謂「南風常に競はず、北人常に勝つ」の北狄侵寇の史實が如實に物語つて居る所であつて、殊に遼、金、元が漢民族を征服したるが如き敢へて此處に贅言を費ひやすまでもあるまい。偶々漢の武帝、唐の太宗が蒙古民族を征服した事例はあるが、こは僅かに四千年の永き歴史中の一瞬時に過ぎぬ。清朝に至つて其の統治下に入つた

のは事實であるが之は決して漢人に征服されたのではない。蒙古が準葛爾王葛爾丹ジンガルカルクタンの



蒙 古 の 姿

侵略を恐れて清朝即ち滿洲朝康熙帝の援助を求め、進んで其の保護を受けたのが動機となつて、引續き民國成立以後も其の統治を受けたのであるが、其の實漢人政府の統治下にあつたのは僅かに數年に過ぎず、再び滿洲軍閥の支配下に入つたのである。故に蒙古人有識者が常に「蒙古が支那を征服した事はあるが、支那に征服された歴史は持ち合せて居ない」と豪語するのは洵に當然の理であつて、河北省、山西省、陝西省、甘肅省に亙る延長八百餘里の萬里長城以北に漢人支那が存した事は未だかつてないのである。

第二章 地域と地勢

蒙古は北方に西興安嶺、薩彥山脈サヤンを負ふて露西亞と境を接し、東方の大興安嶺及び東南方の陰山々脈を越えて滿洲國及び支那に通じ、西南方は阿爾泰山脈アルタイを以て甘肅省及新疆省に連り、その高度は千米餘に及ぶ一大高原地帯であつて、西部は山岳、河川、湖沼に富んだ交通不便なる複雑地であるが、東部は之に反し極めて平坦なる草原沙漠地帯である。

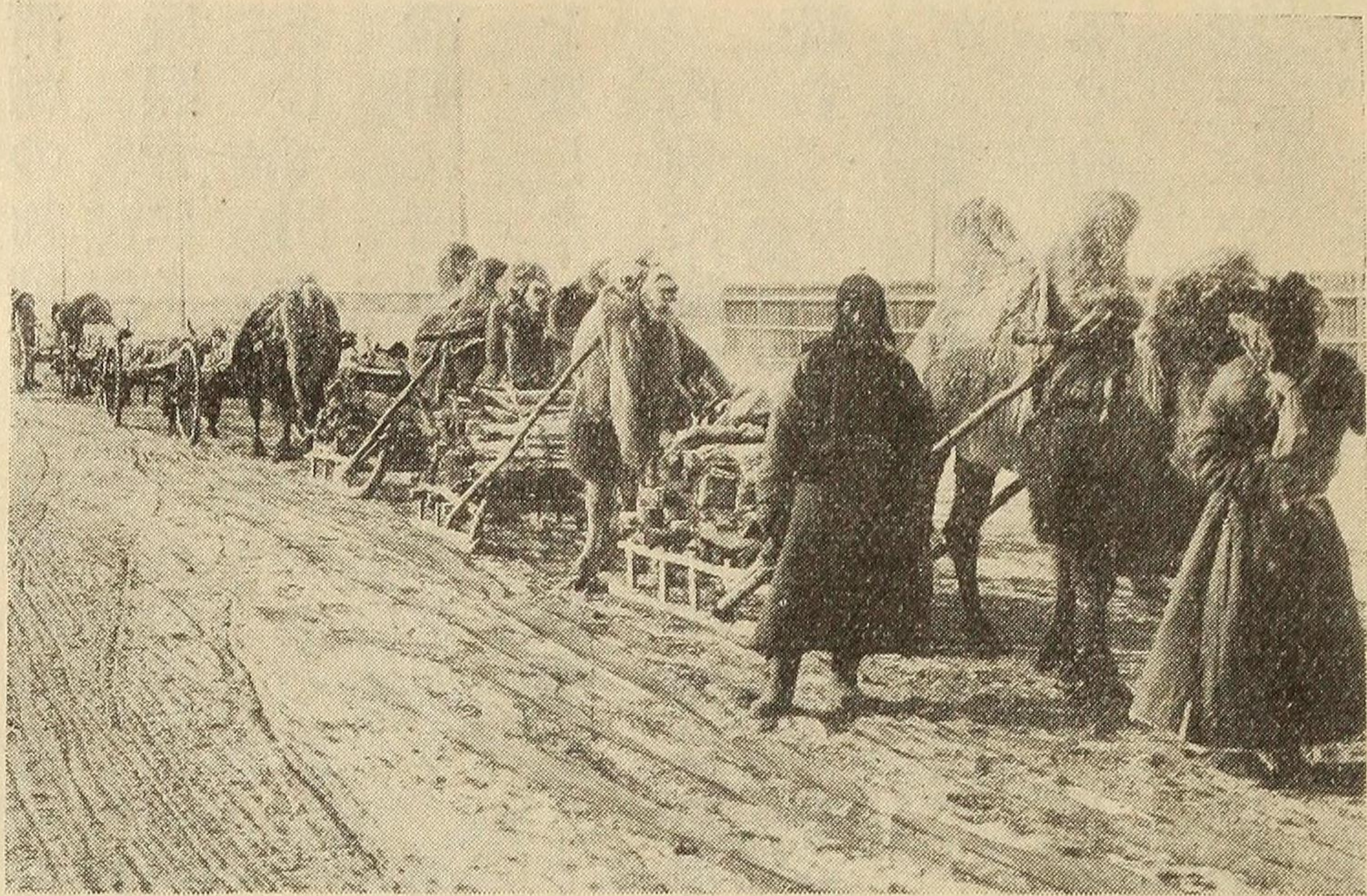
蒙古の總面積は約二十三萬方里であつて、外蒙古丈けでも東西六百二十五里、南北二百五十里に互り、その地域を概念的に云へば東は南滿洲鐵道と北滿洲鐵道南部線、北は北滿洲鐵道本線と阿爾泰山脈アルタイ、南は萬里の長城、西は支那の西北突角から西北に引伸した一線、此の四邊に包まれた不正四邊形が蒙古である。而して此れを縦貫する戈壁の大沙漠で劃り、漠北を外蒙古、漠南を内蒙古と云ふ。外蒙古の内、西北の一角

を唐奴烏梁海タンヌウーリヤンハイとして取除き、殘部を縦に五分して東から車臣汗チエチエンハン、土謝圖汗トウシエトハン、三音諾顏サンインノイエ汗ハン、札薩克圖汗ジャサククトハン、科布多コブトの五汗と呼び、內蒙古の全部を縦に三分して東から熱河省、察哈爾省、綏遠省の三省となし、熱河省の東北方にある東部內蒙古及び車臣汗東方大興安嶺西方地區の呼倫貝爾ホロンバイルを興安省と稱して居る。

第三章 沿革の概要

第一節 明朝以前

蒙古人はそのかみ苗ベウ、匈奴キョウド、突厥トツケツ、韃靼等ダツタンと稱せられて居たが、族長海都ハイトウに至つて稍々強く、降つて五世也速該イエスゲ出でて、漸次その勢力を増大し、金の附庸として黑龍江畔を遊牧したが、更に其の子成吉思汗ジンギスハンは強隣諸族を合して、之と敖嫩河畔オニンに會盟し、皇帝と稱して世界統一を誓つた。是れ我が源賴朝時代で西曆千二百六年である。爾來征戰二十年、甘肅省の六盤山で死去する迄、滿漢を取り、中央亞細亞を收め、南露西



冬の交通機關

亞を降し、支那北半を平げ、印度、波斯に出兵し、即ち亞細亞の大部と歐羅巴の一部を併呑して主となつた。即ち此れ斯の元の太祖である。

次で太宗、定宗、憲宗等相繼いで即位したが、太宗は裏海北方から莫斯科、カザン、キエフを陥れ、波蘭、匈牙利を侵し、又帖木兒テムールは遠く土耳古及び印度を打ち、歐米人をして大黃禍來を叫ばしめたのであつたが、元朝百年の榮華も帝族諸侯の不和と、漢人の文化とよつて、遂に明の滅す處となり、その後は關外から頻りに明朝を悩ましたけれども、遂に清の康熙帝の時、西

曆千六百八十八年其の主權下に入るに至つた。

第二節 清朝時代

清朝の初期蒙古は群雄割據の状態であつたが、ジュンガル準葛爾王カルタン葛爾丹の來襲に驚いて援助を康熙帝に求めた。其の實カルタン葛爾丹は西藏ダライラマ達賴喇嘛の命を受けて、外蒙の内亂を鎮定せんとして出兵したのであつたが、蒙古の王侯は其の真相を知らなかつた爲め、輕卒にも清朝に倚賴して後事を誤り、所謂蒙古史上一大過失として今尙有識者の痛恨する汚點をなした。カルタン葛爾丹の來襲をうくるや、蒙古諸王は會議を開いて鳩首善後策を圖つたが、内争に疲れて居る彼等は結局他方に依るの外なすべき術もなく、更に露支何れに倚賴すべきかを協議したが、諸説紛々甲論乙駁して決しなかつた。然し活佛哲布尊丹ジェブソンタン巴バが「支那は蒙古と人種も同じく、人情に篤くして、服裝も類似し、禮讓に篤く其の風俗は仙人の様であるから、支那に頼るのが子孫萬代の爲の大計である」と言つたので諸王は之に従ひ使を清朝康熙帝に送つて救助を求めた。康熙帝は時來れりと大いに悦び、大兵を派遣してカルタン葛爾丹を討伐し、避難し來つた蒙古人を優遇し、特に蒙古諸王

侯を多倫諾兒トレンノールに集めて、王侯會議を開き、山海の珍味を饗應して歡待し、其の懷柔收攬に成功した。

斯の如くして、漠南漠北の内外蒙古族は遂に清朝の附庸となつたが、清朝は支那歴代北邊の禍根を知悉して居たので、頗る巧妙な政策を以て、之を去勢懷柔し、爾來二百年雌伏せしむる事に成功した。其の政策の概要を摘記すれば左の通りである。

一、王侯の數を増して各々小王侯に分封し、彼此相互に控制せしめて其の勢力を削減した。

二、諸王には北平に王府を建設せしめ、常に引見して北平參勤をなさしめ、酒色遊山の優待を以て支那式遊墮の風習に馴致し、金錢を徒費せしめて其の雄志を奪ふた。

三、喇嘛教を振興せしめ迷信に耽らしめた。即ち彼等蒙古人の荒涼たる沙漠と草原に於ける寂寞の生活に乗じて、來世の安樂を以て誘惑し、一家中の男子中一名を除き、其の他は必ず入道せしめ、喇嘛は納稅、其の他總ての義務を免ぜられ、無妻即ち多妻

の惡風に染み、念經以外は所謂學者、物識り、顔役の萬能權力の立場にあつて、葬祭、訴訟、教育、醫療、媒介等總ての行事を管掌した。衆民は喇嘛を扶養する義務を有し、財物は勿論、甚しきは婦女の貞操まで提供するに至つた。

四、活佛に政權、軍權を委ね喇嘛の勢力を扶植増大せしめ、北平、熱河、五臺山等の要地には大寺院を設けて衆民をして競ふて參拜させ、以て其の蓄財を消費せしめた。

五、清兵を庫倫^{クーロン}、烏里耶蘇臺^{ウリヤスダイ}、桑貝子^{サンベイヅ}其の他の要地に配置し、官吏と共同して活佛並に王侯を監視し、反逆を防ぎ制壓に努めた。加之、支那商人は蒙古人が商業を營まざるに乗じ、狡猾なる手段を以て彼等純朴なる良民を欺瞞して財物土地を騙取し、彼等をして窮乏せしむるに至つたので、蒙古人は甚しく支那商人を嫌惡し、軒を並べて居住する事すら厭ふやうになつた。

第三節 清朝末期露國の侵略時代

160

蒙古と露國との關係は一時中斷されて居たが、其の淵源は頗る古く、成吉思汗の大蒙古建國に當つては露國は其の版圖の一部をなして居つた。然るに露國の東洋に對する領土的野心は漸く第十六世紀の末期に始まり、本節末尾の數多き條約の締結された事に依つても明らかなるが如く、爾來傳統的なる不斷の努力は帝政時代の經濟的野望から漸次領土の侵略に變じ、更に思想的方面にまでその勢力を及ぼしたのである。其の巧妙なる活佛王侯懷柔と圓轉たる對支強要は露國政策の特徴である。西曆千九百年露國人クロツトが十萬留を外蒙古に撒布し、別に一萬五千留を活佛哲布尊丹巴呼圖克圖に贈與したのも其の一例であつて、外蒙古特にブリヤート人有識者を懷柔重用した事が現在外蒙古共和國の建設に甚大なる關係を有して居る。例之ビンバエフ、ナムサライ、ゴンボバトマジヤップ等も其の主要なる人物であつて、ビンバエフは言語學者として重用せられ露蒙字典、蒙露字典を編纂し、ゴンボバトマジヤップは郵便局長、野戰病院長、陸軍諜報大佐に歴任して優遇を受けた。外蒙共和國の建設者で初代の國

務總理たりしソクバートルは露國のタイピストから身を起した青年である。

そもく五百年前迄の西伯利亞は純然たる蒙古民族の遊牧地であつて、その後露國の流罪地に利用せられてから、年を逐うて商隊農民と共に派遣せられた屯田兵即ち西伯利亞カザックが現在の國境一帶に哨所を設けて配備せられ、耕地の分與、居住の自由、税金の免除其の他の特權を附與された。且つ又露蒙國境附近一帶に就ては九十九年間の長期間に互る租借條約を何回となく更新締結して、之を露國政府の名を以て蒙古より租借し、更に其の實權を露國人資本家に掌握せしめたる結果、セレンガの上流恰克圖^{キヤクト}東方イロ河畔十三鑛區の廣地域に互る砂金鑛地帶、露蒙國境一帶の森林地帶並に農耕地は總て事實上露人の所有に歸し、蒙古人は彼等の爲すが儘に放置してその横暴を怪まざるに至つたのも可憐の至りである。又カザック及び流罪人等は婦女子を伴はなかつたから、自然蒙古婦人を占用するもの多く、爲に多數の混血兒を生じ又盛んに花柳病を傳播した。

露支蒙關係條約一覽表

西曆一七二七年

恰克圖條約^{キヤクト}

一八五一年

クルジヤ條約

一八五八年

愛琿條約^{アイケン}

一八六〇年

北京條約

一八六二年

北京條約

一八六四年

知多條約^{チタ}

一八八一年

伊犁條約^{イリ}

一八八二年

カシガル條約

一八八三年

烏里耶蘇臺條約^{ウリヤスタイ}

一八九九年

露支密約

一九一二年

露蒙協約

一九一三年

北京條約

一九一五年

恰克圖條約^{キヤクト}

一九二一年

露蒙條約

一九二四年

露支通商條約

第四節 支那革命時代

露國の外蒙に對する野望は清朝の對蒙政策によつて、意の如く伸展するを得ず、時々露蒙國境に於て小衝突を繰返し、僅かに支那の内争に乗じて虎視眈々驥足を伸して居るに過ぎなかつたが、西曆千八百五十八年ムラビョフ將軍が愛琿條約を締結して此處に黑龍江以北を領有するに至つた。

此れより先、露國は地中海に進出せんとして西方歐羅巴諸國との間に數世紀に亙る慘烈なる戦争を敢てしたが、結局志ならず、次いで「東方不凍港」てふ標語を目標として、遂に日露戦争を惹起し、却つて忠勇なる皇軍の排撃の前に一敗地に塗れて、滿

1911
洲、朝鮮を放棄するの止むなきに至り、爾後専心全勢力をあげて銳意蒙古進出を企圖し、支那の革命に乗じて蒙古人を教唆煽動し、先づ外蒙古を獨立せしめ、次で呼倫貝爾^ルをして反旗を翻さしめた。此れ西曆千九百十一年の事であつた。茲に於て露國は好機至れりとなし直ちに外蒙侵入を敢行し、此の間支那、蒙古と數次の會商を行ひつゝ、逐次其の勢力を伸張した。續いて庫倫^{クーロン}には五ヶ年制度の露蒙語學校を設置し、露國人に蒙古語、支那語、西藏語を教育し、同時に蒙古人の露語教育を實施した。茲に露國人の教育を詳述すれば、三ヶ年は之を基礎教育課程に充て、次の一ヶ年は各人一個の幕舎を建設し、以て蒙古人と同棲して語學のみならず生活、人情、風俗の微細に至る研究を積み、最後の一ヶ年は蒙古、支那、西藏の各専門に分れて各地を旅行視察すると云ふ極めて周到なる制度になつて居たから、露國將校中同校を卒業し、蒙古西藏の實情に精通するもの極めて多數に上つてゐる。之に反し我國の所謂蒙古通の淺薄なる知識は往々誠に冷汗三斗に價するの感がある。

第五節 露國革命以後

露國に革命勃發するや、支那は此の機乘ずべしとなして、西曆千九百十九年十一月
徐樹錚を西北駐邊使兼西北邊防總司令と云ふ大袈裟なる職に任じ、以て手兵四千を指
揮して外蒙古の首都庫倫クーロンに入城せしめた。

茲に於て蒙古獨立の氣勢は再びブリヤートに依るウエルフネウジンスクを中心とす
る後貝加爾附近ザバイカルを導火線として起り、呼倫貝爾附近ホロンバイルに於てはセミヨノフ軍を背景とし
て滿洲里西方のダウリヤに蒙古軍を編成し、更に貝加爾湖東岸ウエルフネウジンスク
に各地の代表者會議を開き、遠くは綏遠スイエン、科布多コブト、烏里耶蘇臺ウリヤスタイの代表も參列して盛會
を極め、更に使者を日本に派遣して援助を乞ふた。然るに當時我が國策は之れを許さ
ず、國家百年の大計を思ふ國士をして轉た切齒扼腕せしめたが、哀れ蒙古は日本軍後ザ
貝加爾撤退後數ヶ月を出でずして恰克圖北方セレンガ河畔に於て、赤軍の爲め全滅の
悲運に陥つた。

其の後支那は安直戰（第一次奉直戰爭）の結果、安福系敗れ、徐樹錚失脚して、陳毅之に代り、庫倫クーロンに位置して外蒙の壓制に任じたが、部下の隊長堵其祥と意見合はず、常に内訌を事とした。一方セミヨノフ軍の猛將バロン・ウンゲルは西曆千九百二十年十月、手兵三千（一部は車臣汗チエチエハンの蒙古人）を率ひてダウリヤより桑貝子サンペイツを経て蒙古に入り、翌年二月庫倫クーロンを占領して、支那人を慘殺したる事四萬に及んだので、團長高在田は部下若干と共に辛じて露蒙國境に沿うて滿洲里に逃れ、外蒙古は白露支援の下に再び獨立するに至つた。

然るに日本軍が後貝加爾ザバイカルを撤退してから、セミヨノフ軍は遂に滿洲里附近に壓迫せられ、支那軍の爲め武装解除を受け、一方蘇國は元領事館タイピストたりしソクバートル等親露蒙人を支援して入蒙を企て、先づ支那に對して形式的に共同出兵を促し、内争に餘念なき支那の回答なきに乗じて、バロン・ウンゲル軍を攻撃し、庫倫クーロン東方地區にて之れを撃破し、西曆千九百二十一年七月八日同地を占領し、直ちに露蒙密約を

締結し、親露蒙人を指導して、議會制度を設け、赤化の第一歩に入つた。

而して直ちに小國民會議を召集したが、國民黨中新舊兩派の壓轢猛烈に起り、成吉^{ヂンギ}斯汗^{スハシ}以來七百年間傳はれる蒙古思想は急激なる赤化を許さず、新派は常に舊派の壓迫を受けて居つたが、機を見るに敏なる蘇國は活佛を虚位に擁して民心を緩和することに努めた。(黄の旗を翻して宗教の礎を固めて、赤の旗を翻して國の基を建て、セミヨノフの殘黨を殲滅して……)と云ふ國歌を制定したのを見ても、此の間の消息は明らかである。

其の後蘇國は新派の請願によつて、歩兵一聯隊、砲兵一中隊の赤軍を庫倫^{クーロン}に駐屯せしめ、常に舊派即ち王侯喇嘛派を壓迫したが、後者の勢力は依然新派の上にあつて、遂に放逐、監禁、銃殺等のテロリズムを敢行し、約二ヶ年に亘る恐怖時代を現出した。

次で西曆千九百二十四年三月、活佛哲布尊丹巴呼回克圖^{チエブソンタンバホトクトクト}が入寂した。哲布尊丹巴^{チエブソンタンバ}は

1924



喇嘛・的の敬崇

西藏の達賴喇嘛ダライラマ（第一位活佛）、班禪喇嘛パンチヤンラマ（第二位活佛）に次ぐ大活佛で、西曆千八百七十年西藏に生れ、五歳の時外蒙法王に迎へられた第八代庫倫活佛クローンで、初代以來二百七十年で其の位を失つた。

蒙古人の活佛に對する信仰は全く盲目的であつて、今尙ほ多數の蒙古人が遠隔地から常に庫倫に集つて廢宮の周圍を巡りながら禮拜する様は可憐の至りで、彼等は蘇國が活佛を毒殺したのであると信じ切つて、恨んで居るとのことである。

蘇國は赤軍入蒙三週年、即ち西曆千九百二十四年七月八日に外蒙共和國を建設して、

十一月大國民議會を召集し、ソヴェート式の政綱を定めた。

第四章 生業と資源

蒙古人は牧畜、狩獵を生業とし、水草を追うて原野を移住して居るから、家畜を愛することは恰も親の子に對するが如く、仔羊等は常に室内で家人と起居を共にして居る。

零下四十八度に降る極寒の時は親羊の乳を搾つて室内に運び、牛の角の尖端を切つて作つた漏斗狀の給乳器で仔羊に飲ませて居るが、老婆が自分の口に含んで、口うつしに飲まして居るのも見受けられた程である。

蒙古人が途中で他人と會つたときの挨拶は「御宅の家畜は如何ですか？」と呼びかけ、對手は「有難う、元氣です！御宅の牧草は如何ですか」と答へ、御互ひの健康よりも先に家畜のことを挨拶するのが例である。結婚の結納其の他の贈物も、納税も



ミレの繪畫か

總て家畜であるから、「彼の花嫁は羊五百匹、牛五十頭、馬十頭だ」等と噂して居る。

財産家を形容するにも日本では「彼の人は三千萬圓の金持ちだ」等と云ふが、蒙古人は「彼の人は羊一萬匹、牛千頭、馬二千頭の家畜持ちだ」と云ふのが常である。

蒙古人の天幕には少くも五六匹、多きは二、三十匹も蒙古犬を飼つて居るが、之れは彼等の大切な家畜を害する狼の來襲を防ぐ爲めであつて、夕刻狼の吠ゆる聲が聞えると全村の群犬が吠えだして、其の聲は喧噪を極め、「一犬虚に吠ゆれば萬犬實を傳ふ」の支那の俗諺も俚ばるゝ程である。蒙古人は之に依つて狼の

來襲を知り、先づ天幕の周圍に焚火して、家畜を集め害を免るゝのである。狼は火光を恐れるから旅行者は煙草の火でよく難を避けることがある。蒙古の犬は家畜の保護の爲めに上述の通り必要であるが、性勇猛であつて、人肉の味を知つて居るから、誠に危険であつて、馬賊も之を恐るゝとのである。それで蒙古人が天幕を訪れた時は「御免下さい」と呼ぶかほりに、「犬を集めて下さい！」若しくは「犬を監視して下さい！」と挨拶するのが例であつて、之れに依つて家人は犬に聲をかけて、敵でないことを示し、犬も安心して落ちつくのである。

蒙古では古來野葬の風が行はれて居て、死人があれば讀經してから野原に送つて放置し、鳥獸の食ふに任せ、數日經過しても肉片が残つて居れば「彼の人には犬も食はぬ」と現世で惡業でもあつたかのやうに惡口を言ふ習慣があるから、蒙古犬は人肉の味を知つて居る譯である。

蒙古の主要物産は畜産並に狩獵品であつて、別表の如く莫大なる輸出力を有し、輸

入品の主なるものは麥粉、稗、茶、烟草、織物、藥品、金屬製日用品、靴、文房具、雜貨等であつて、外蒙貿易總額輸出一六〇〇萬元、輸入二六〇〇萬元に上る。西曆千九百二十七年貿易の各國別比率は下表の通りであるが、目下其の總額の四分の三は露國に獨占されて居る。

蒙古輸出入國別比率表

概數
 輸出二〇〇〇萬元
 輸入三〇〇〇萬元
 とす

| | | | | | | |
|----|----|------|------|-----|----|-----|
| 輸出 | | 二〇・〇 | | | | |
| | | 支那 | 四・〇 | | | |
| | | 外國 | 一六・〇 | | | |
| | 露國 | 七・〇 | 米國 | 六・〇 | 獨國 | 二・〇 |
| | 日本 | 〇・六 | 其他 | 〇・四 | | |

內外蒙古及興安省地方資源一覽表

1. 內外蒙古

家畜

駱駝

馬

牛

輸入 三〇〇〇

支那 一〇〇〇

外國 二〇〇〇

| | | | | |
|-----|-----|-----|-----|------|
| 其他 | 米國 | 獨國 | 日本 | 露國 |
| 〇・三 | 〇・五 | 一・五 | 六・〇 | 一一・七 |

二七五、〇〇〇頭

一、四〇〇、〇〇〇頭

一、五五〇、〇〇〇頭

狩獵品



沙漠の船・駱駝

| 畜産品「生産高」 | 綿 | 山 | 羊 | 羊 | 馬 | 馬 | 牛 | 羊 | 馬 | 羊 | 駱駝 |
|----------|-------------|-------------|---|---|----------|---------|------------|----------|---------|-----------|----------|
| 計 | 一〇、七〇〇、〇〇〇頭 | 一三、九二五、〇〇〇頭 | 羊 | 羊 | 皮 | 皮 | 皮 | 皮 | 皮 | 腸 | 毛 |
| | | | | | 三〇〇、〇〇〇枚 | 四五、〇〇〇枚 | 二、五〇〇、〇〇〇枚 | 二五、〇〇〇布度 | 三、〇〇〇布度 | 八八九、〇〇〇布度 | 六〇、六三七布度 |

タルバカン皮

三、〇〇〇、〇〇〇枚

栗鼠皮

三〇〇、〇〇〇枚

其他

二〇〇、〇〇〇枚

計

三、五〇〇、〇〇〇枚

鑛産

石炭

一三三、〇〇〇噸

其他金、銀、錫、玉石、琥珀等の資源に富み、特に恰克圖^{キヤクト}東方セレンガ河の上流イロ河に沿ふ露蒙國境一帶は壯觀なる古木の^{大森林地帯}と十三鑛區約百里に亙る豐富なる砂金鑛あるも、蒙古人は宗教上土地を掘ることを厭ふ爲め、總て露人に占有され、極めて原始的なる採掘法に依つて相當の利益を擧げて居る。

2. 興安省附近

家畜

駱 駝

九、〇〇〇頭

馬

一八〇、〇〇〇頭

牛

一七〇、〇〇〇頭

綿

一、六〇〇、〇〇〇頭

山

羊 羊

豚

二、四〇〇頭

一、九六一、四〇〇頭

森 林 計

面 積

三〇、〇〇〇平方吉米

一ヶ年最大輸出力

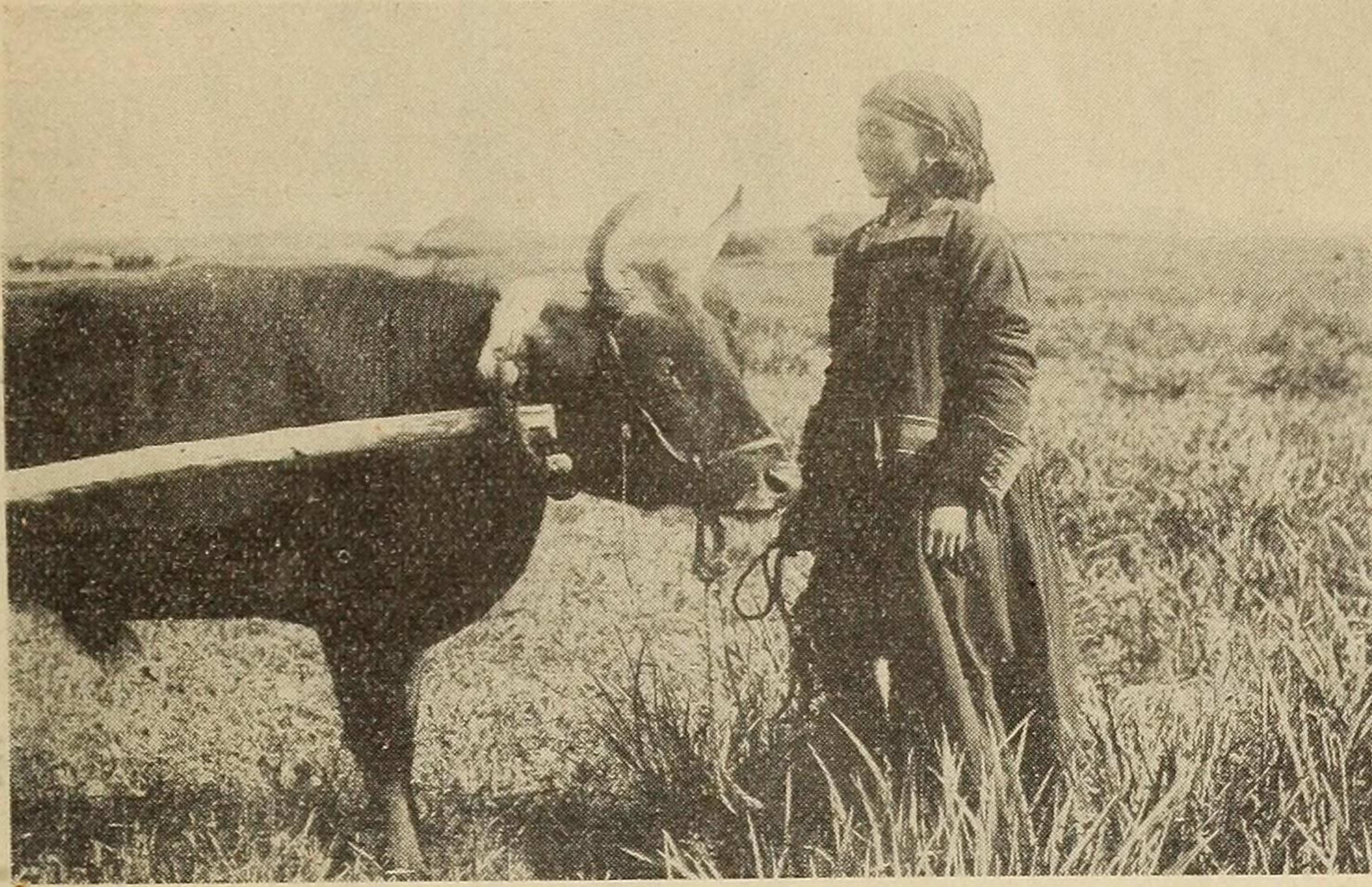
三三、〇〇〇噸

畜產品「輸出高」

牛 皮

三〇、〇〇〇枚

馬皮



自慢の牛

一五、〇〇〇枚

羊皮

二〇〇、〇〇〇枚

計

二四五、〇〇〇枚

肉類

一〇、〇〇〇噸

馬毛

三、〇〇〇布度

羊毛

一〇〇布度

狩獵品

タルバカン皮

七〇〇、〇〇〇枚

其他皮

四〇四、一〇〇枚

其他

石炭

二二五、〇〇〇噸

漁業品

八、〇〇〇噸

Pashkuba

穀類

二、〇〇〇噸

黄油「バタ」

一五〇噸

獸脂

二〇噸

酒精

八〇噸

樹脂

二〇噸

第五章 蒙古の喇嘛か、喇嘛の蒙古か

民族研究の爲には宗教は等閑に附すべからざるものであつて、佛教が釋尊の發現地である印度に其の影を潛め、日本を除いては僅かにセイロン島とシヤムに其の信者を殘して、其の發祥地の寺院を守つて居り、東洋に於ける民族的宗教は之れにシヤマン教的密教の現實味を加味せる喇嘛教、回々教、印度教が振興して居るのは注目すべきことであつて、喇嘛教は約七百年前元の聖祖の時代に西藏の高僧巴思克巴パスクバに依つて蒙古

Parafun

に傳へられたが、廣漠たる原野に狩獵と牧畜を專業とし、單調なる生活を營む蒙古人の悦んで歸依する處となり、加之、上述の如き清朝の去勢政策に乗ぜられて益々膏盲



喇嘛の盛装

に入り、喇嘛教國の常として活佛は主權者である上に、經典は佛教の夫れと異つて所謂學問の總てを網羅して居り、數學、地理、歴史、物理、化學、倫理、天文、易學、教育、醫學、甚しきは房事に關する事柄まで含ま

れて居るから、喇嘛は僧侶であり、學者であり、物識りであつて、冠婚葬祭、教育、醫療、卜筮等總ての官僚並に顔役の爲すべき仕事を掌つて居る。従つて、ハラフン即ち平民は萬事を喇嘛の指導に任せ、黙々として生業を勵み、活佛と喇嘛に貢ぐので、

喇嘛の權力は著るしく増大し、果ては專横を極はむるに至つた。

喇嘛祭の時、供物に用ふる卍字型の焼印を押しした饅頭に就て次の様な傳説がある。

察哈爾省チヤハルの或る部落で、餘りに喇嘛の專横が烈しいので、部落民が憤慨して相談の結果、一日喇嘛を襲うて全部殺してしまつた。それで喇嘛の拔扈は無くなつたが、早速困つたのは葬式は勿論、婚禮も、教育も、媒介仲裁も、診療も之れに當る人がなく、困惑して遂に隣村の喇嘛に泣きつかざるを得なかつた。處が隣村の喇嘛は曰く、「それは以ての外の事をした罰だ。仕方がないから早速部落で饅頭を成る可く澤山造つて喇嘛祭をしたがよい。自分の村の喇嘛が總出で讀經してあげるから。」依て其の通りに供へたのが此の饅頭で、結局心痛したのと饅頭と餘計に損になつたと云ふ話である。

又、或る蒙古人が一生働いて蓄へた家畜を、旅費と供物に代へて、庫倫クーロンの活佛を拜みに行く途中で、或る夜宿場に泊つて居ると、深更に及んで隣室から誰か這入つて來る氣配があるので、恐る／＼細目をあいて見ると、逞しき兇漢が研ぎ立ての蒙古刀を

振り上げて、今にも切り掛つて来る様子なので、旅人は驚愕して跳ね起きざま、兩手を擴げて之れを遮り、「何うぞ許して下さい。私は一生の汗で造つた財寶を持つて、活佛を拜みに行くのだから、それが濟んだら命は差上げます。それまで待つて下さい」と懇願した。すると兇漢は振上げた蒙古刀を下して、「左様でしたか。私は生膽を活佛に供へると何よりの功德になると聞いたから、三年程前から人殺しを始め、漸く九十九だけ出来たので、貴方のを加へて百にして、^{クローン}庫倫に上る心算だつたが、それは困りましたね」と言つて暫らく思案して居たが、やにはに刀を翻へして自分の胸に突き差した。旅人は思ひ設けぬ此の仕打ちに驚いて其の理由を訊ねると、兇漢は苦しい息の下から「之れが一番上策です。私の膽で丁度百になるから、貴方は隣室に置いてある九十九と私のを持つて、^{クローン}庫倫に行つて活佛に御供へして下さい。さうすれば貴方も私も二人共極樂に行けるから」と言つて瞑目したと言ふ傳説がある。

蒙古第一の活佛は庫倫クローンに都して、哲布尊丹巴呼圖克圖チエブソンタンバホトクトクと號し、西藏の達賴喇嘛ダライラマ、班

チヤンラマ
禪喇嘛に次ぐ教主である。蒙古人の活佛に對する信仰は全く盲目的で、終生働いて得た財寶を供へて甘んずる程であるから、蒙古人と喇嘛教とは全く一體不可分とも云ふべく、其の民情は悉く喇嘛教に因由して居ると言ふも過言でない。故に蒙古民族の文化指導に當つては、先づ喇嘛僧を善導利用すると共に、直接民衆に對しては急激なる革正を強請せざる事が肝要である。

第六章 原始的なる其の民情

七百年前成吉思汗時代チンギスハンと異なる處なき原始的放牧と狩獵とを、大自然と喇嘛教の恩恵の下に、唯一の生業として營んで居る悠長、愚昧、朴直なる蒙古民族に接するには、蒙古の歴史地理と彼等の性質、人情、風俗、習慣に通曉しておかねばならない。然らざれば厚意で施した事も却て猜疑を招く原因となり、親切も仇となる恐れがある。過日新京に興安省の蒙古王侯が集つた時、滿洲國當事者が「索倫ソロンからハロンアルシヤンを

經て、海拉爾^{ハイラル}迄鐵道を敷設してやらう」と話した處、王侯等は迷惑相な顔をして「夫れは思ひ止つて頂き度い。文化が侵入して、便利がよくなると、民衆が贅澤になつて

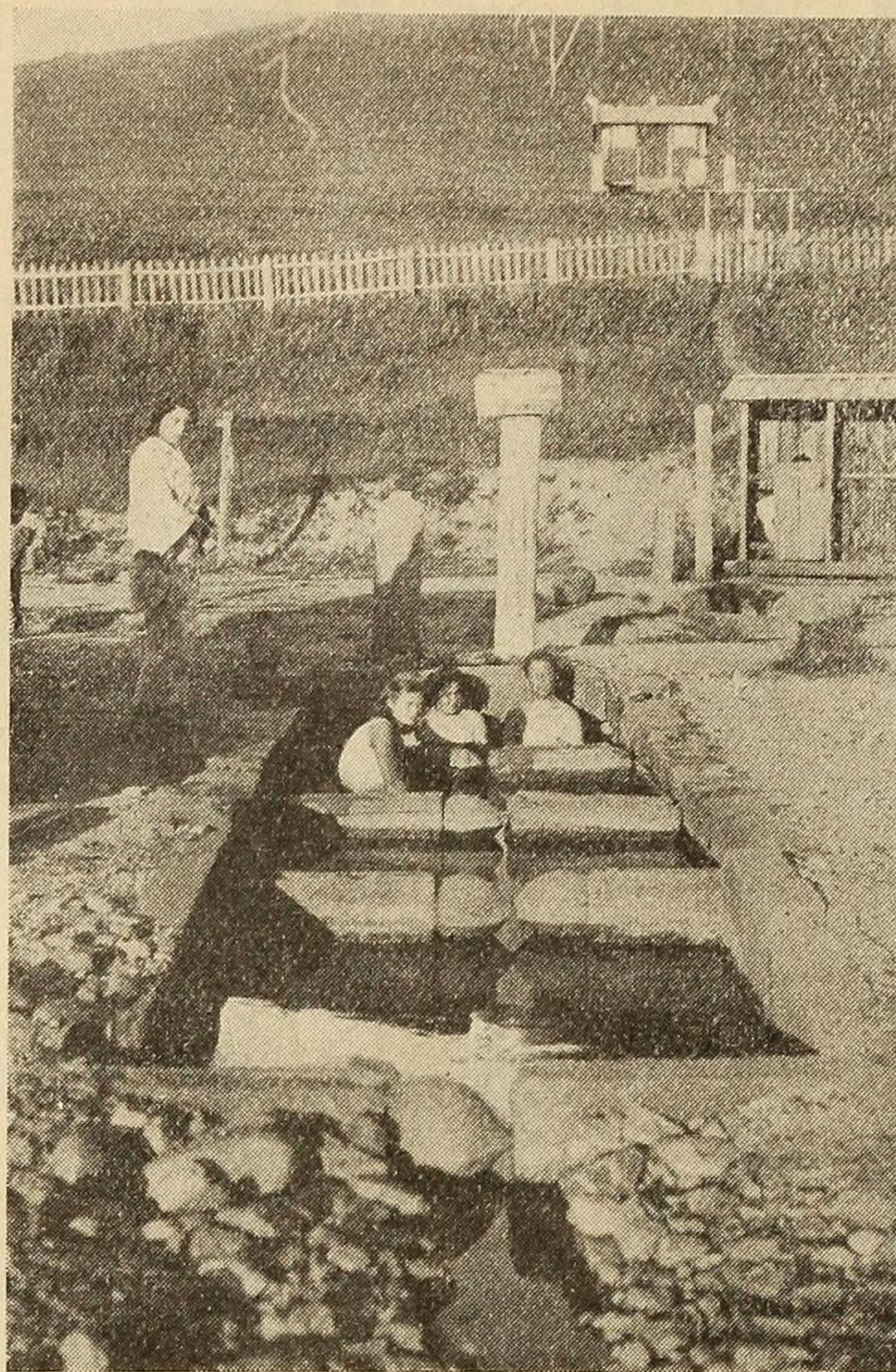


良家の處女

困るから」と謝絶したさうである。又、海拉爾^{ハイラル}西方五十五里のハンダガヤと呼ぶ部洛で某日本人が零下三十度の寒氣に堪へかね、枯草を刈り集めて焚火した處、其の附近の蒙古人は家畜の牧草を粗末にしたと言つて憤慨

し、代表を擧げて海拉爾^{ハイラル}特務機關長に訴へ出たことがあつた。又、ハロンアルシヤン（溫泉）は天與の靈泉であるから、屋根を設けるとは以ての外であると云つて、文化施設を認めないのである。

上述の如く文化人には一笑に附せらるべきことも、蒙古人にとつては天下の一大事であるから、左に吾人の心得べき重要事項を断片的に摘記して見やう。但し満洲國內



ハノルアンシルヤンで浴みして

には蒙古人の最も罪惡とする農耕を營んで居る者がある位で、相當に支那化して居り、更に外蒙地方のブリヤートには露西亞化して居る者も少くないから、此の點は多少の考慮を要する。

第一節 乘馬は巧妙

蒙古人は狩獵を好み、春獵、

秋獵と稱して集團的に之を催す外、單獨で始終山野を跋渉するから、乘馬は先天的に熟練して居る。六、七歳の少年、否寧ろ幼兒が裸馬に跨つて疾驅して居るのを見ると、

天晴れ流石歐洲までも蓆捲した成吉思汗チンギスハーンの子孫であると點頭かれ、更に喇嘛廟の祭禮の奉納餘興である競馬、流鏑馬やぶさめは極めて巧妙勇壯で、我が國の武家時代も斯くやと思はれる程である。

第二節 家畜を愛する

蒙古人の常食は羊である。火消壺の様な素焼の鍋で骨付きの儘拳大の肉塊を煮て、若干の食鹽で味をつけ、之を鷲掴みにしてムシヤ／＼甘さうに食べる。又其の後の汁の中に團茶と云つて瓦型に固めた茶を削つて投げ込み、羊乳を加へて飲料とするのである。

羊肉は鐵網を焚火にかけ、焼肉として用ひることもあり、兎に角、蒙古人は羊肉と羊乳さへあれば生活し得るのであつて、日本に來て居る蒙古人に何が不自由かと訊ねれば、必ず羊が無いので困ると答へるのである。此の外、菓子菓子は羊乳を固めて造り、酒も羊乳から醸造するし、羊皮の靴を穿き、同じく羊皮の外套を一着に及び、玩具玩具



牛糞の山——貴重なる燃料

で羊の骨で作つてある。又其の雨露をしのぐ天幕も羊毛で造つたフェルト製であり、屋内には同じフェルトの敷物を敷いて居るから、結局蒙古人は羊があれば衣食住にことを缺かず、馬があれば狩獵にも出かけられ、其の上に牛肉と牛乳も用に立て得るので、家畜以外に關心を持たぬやうになつたのも當然至極である。

爲に彼等は自分の身體よりも家畜の方を大切にする傾向があるから、蒙古人に接する場合は決して其の家畜を粗末に扱つてはならぬ。

第三節 喇嘛廟を大切にする

蒙古人の部落は質朴な天幕製住宅の集團であるが、其の中央に特に目立つて壯嚴な、

赤青に色どられた、立派な喇嘛廟が聳え立つて居る。



喇 嘛 と そ の 包

此の廟の周圍に、多きは數千、少くも百餘の喇嘛僧の住宅があり、更に其の外割に民衆の天幕があるのであるから、恰も此の全體は喇嘛廟の爲めの部落と云ふ觀がある。喇嘛教を奉ずる彼等が此の廟を大切にすることは實に外地に在る吾々の想像以上であるから、此處に參拜したときは特に不禮の振舞ひなきやう、又建物、境内を汚損せざるやう注意しなければならぬ。

蒙古人の部落には斯かる廟の外には宏大な建物が無いので、よく之を軍隊の宿營地等に利用したりすることがあるが、必ず彼等の感情を害

し、反感を買ふの不結果に終るものであるから、成る可く參拜以外の場合には濫りに之に接近しない様にした方がよい。

第四節 オボを崇拝する

オボと云ふのは石を積み上げてある所との意味であつて、山の峯、土地の境界、縁、林空、或ひは由緒ある土地等に設けられてあり、大きいものになると御堂まで建ててある所もある。又石の不足な場所では土を盛り上げて、其の突端にホンの印ばかりの石を積んであるやうなものも多い。

で、此のオボは所謂祭天場で、祭禮の日には豚の首を天に投げ上げて、盛大な式典を擧げるのである。

道路工事、其の他建築等を行ふ場合に當つて、此のオボを毀損したり、取除いたりすることは絶対に不可である。又、蒙古人はオボ崇拝を基調として、一般に石其の物に對し、一種の靈的觀念を有して、之を崇拝して居るから、例へば路邊の石塊ですら

濫りに動かすことは、背信者の行爲として排斥される。

^{タオナン}洮南附近に唯一の大きな石山があつて、之を切り出せば建築、土木工事等には大層便利であるが、蒙古人がどうしても之を承諾しないと云ふ話を聞いたことがある。

斯る思想は彼等の中に非常に根強く張つて居るから、一朝一夕で排除することは出来ない。

先づ文明諸國に於ける石材使用の狀況等を知らしめて、徐々に理解さする等、相當長期間の周到なる文化工作が必要である。

第五節 王侯を尊敬する

蒙古人が喇嘛を崇拜することは既に述べた如くであるが、彼等は質朴、蒙昧で信仰的に出来上つて居るから、長上、特に王侯に對する尊敬、服従の觀念も洵に嘆賞すべきものがある。

彼等は、一旦自分が歸服した長上の爲めには如何なる勞力をも惜しまぬは勿論、身

命を賭しても之に仕へる。此の點は、到底現在の漢人の眞似ることの出來ぬ所である。

蒙古人が其の信ずる長上の爲めには涙ぐまじき獻身的努力を捧げることを示す好個の陣中秘話がある。

興安省南警備軍が熱河討伐に参加した時であつた。或る夜某地に宿營することゝなつたが、寒氣が非常に酷しかつた。同軍の指導者は偶々一日本人であつたが、餘りの寒さに眠ることも出來ない。臆がて晝間の疲勞から、眠るともなく夢路を辿つて居ると、夢心地にも自分の身體がポカ／＼と暖かになつて來た。で、彼はいゝ心持ちになつて熟睡したが、夜半もすぎで、フト眼を醒まして見れば、暖かいのも道理、自分の上には他人の外套が被ひかけられて居り、傍らには部下の蒙古兵がブル／＼震へ乍ら寢て居たと云ふのである。

極寒の際、自分の毛皮の外套を脱いで、信賴する上官に寒い思ひをさせまいとする

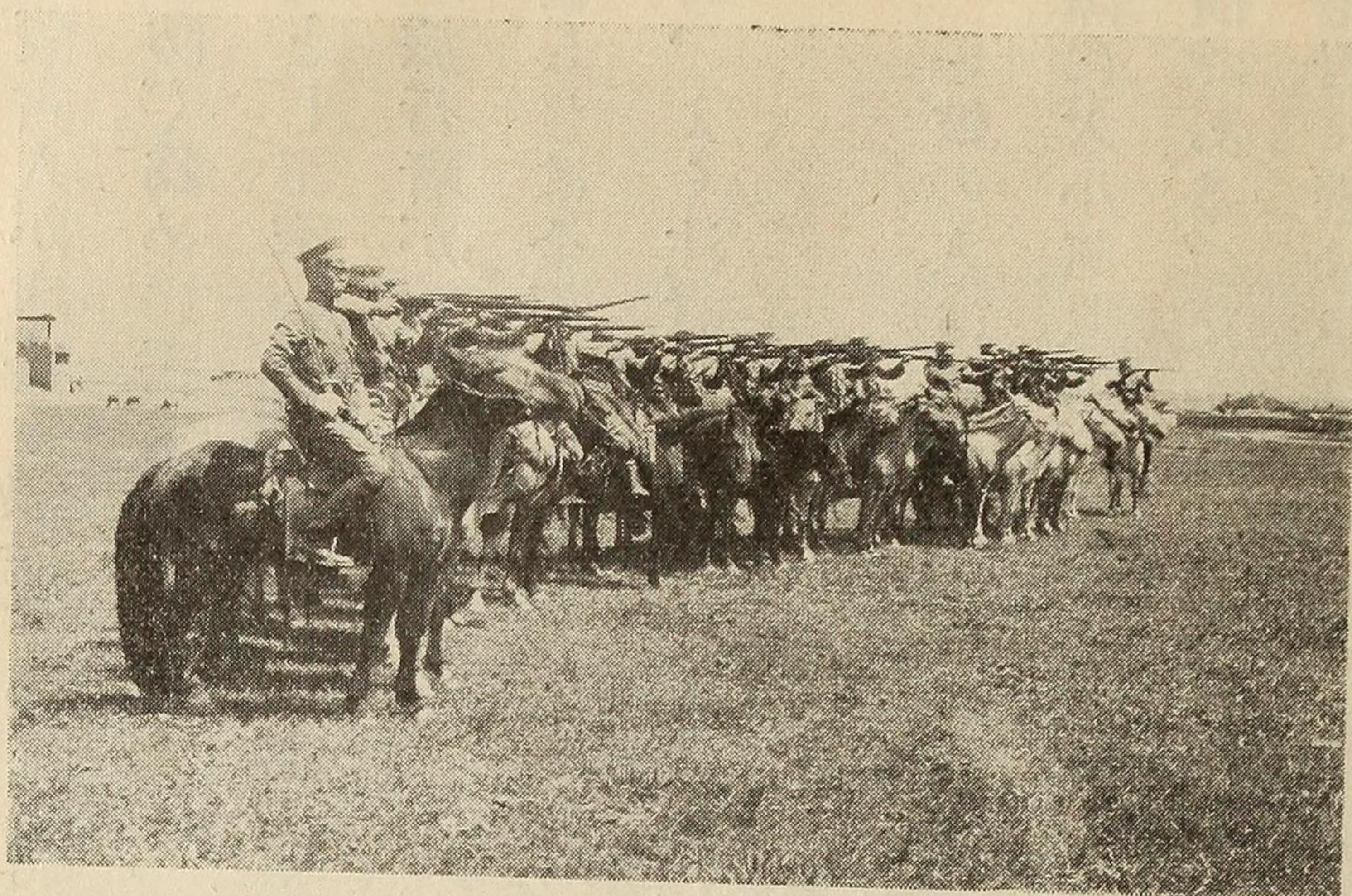
其の心情！ 洵に涙がにじみ出る程嬉しい話ではないか。

儲、以上の如く長上に對する親愛服從の觀念が極めて強固であるから、之を上手に操縱する爲めには喇嘛の外に、先づ王侯を動かすと云ふことが絶対條件であるやうに思はれる。尤も最近は青年連中の間に蘇國、支那の新思想が相當流入して居るから、斯うした異分子的思想に對しても顧慮しなければならぬことは云ふ迄もない。

儲、彼等が長上、特に王侯に絶対的服從の念を有すること、及び既述の喇嘛廟崇拜の事實は理解されたことゝ信ずるが、單純なる彼等が一の信念の前には死地をも恐れぬてふ事例を示して、識者の考慮を煩はしたいと考へる。

大正九年の末、彼の猛將バロン・ウンゲルに従つて庫倫攻撃クーロンに参加せる蒙古軍中殆んど全滅せる部隊があつた。何故、全滅に瀕したかと其の詳細を調べて見た所、蒙古兵は喇嘛教を信仰する者は決して戦死しないと云ふ信念を持つて居て、敵の機關銃彈雨飛の戦場を勇猛果敢に悠々と前進する。そして前に行く兵が戦死すると、あれは未

ければならぬのである。



精銳・蒙古騎兵

だ信仰が足りないのだと云つて構はず進撃を續ける。偕亦其の次が倒れると前生に悪業を積んだ報ひなのだ等と、輕るく片附けて意に介しない。斯うした熱烈な——迷信とも見らるゝ様な——宗教心に依て、此の部隊は眞に決死の攻撃をなし得たのであつた。大體、蒙古人の喇嘛教に對する信仰は斯くの如く盲目的であつて、人間が働くのは活佛や喇嘛に供物をする爲めである。とさへ考へて居るのであるから、彼等を操縦するには喇嘛教を理解すると共に、その信念、信仰、服従の觀念に於ける機微を掴かまな

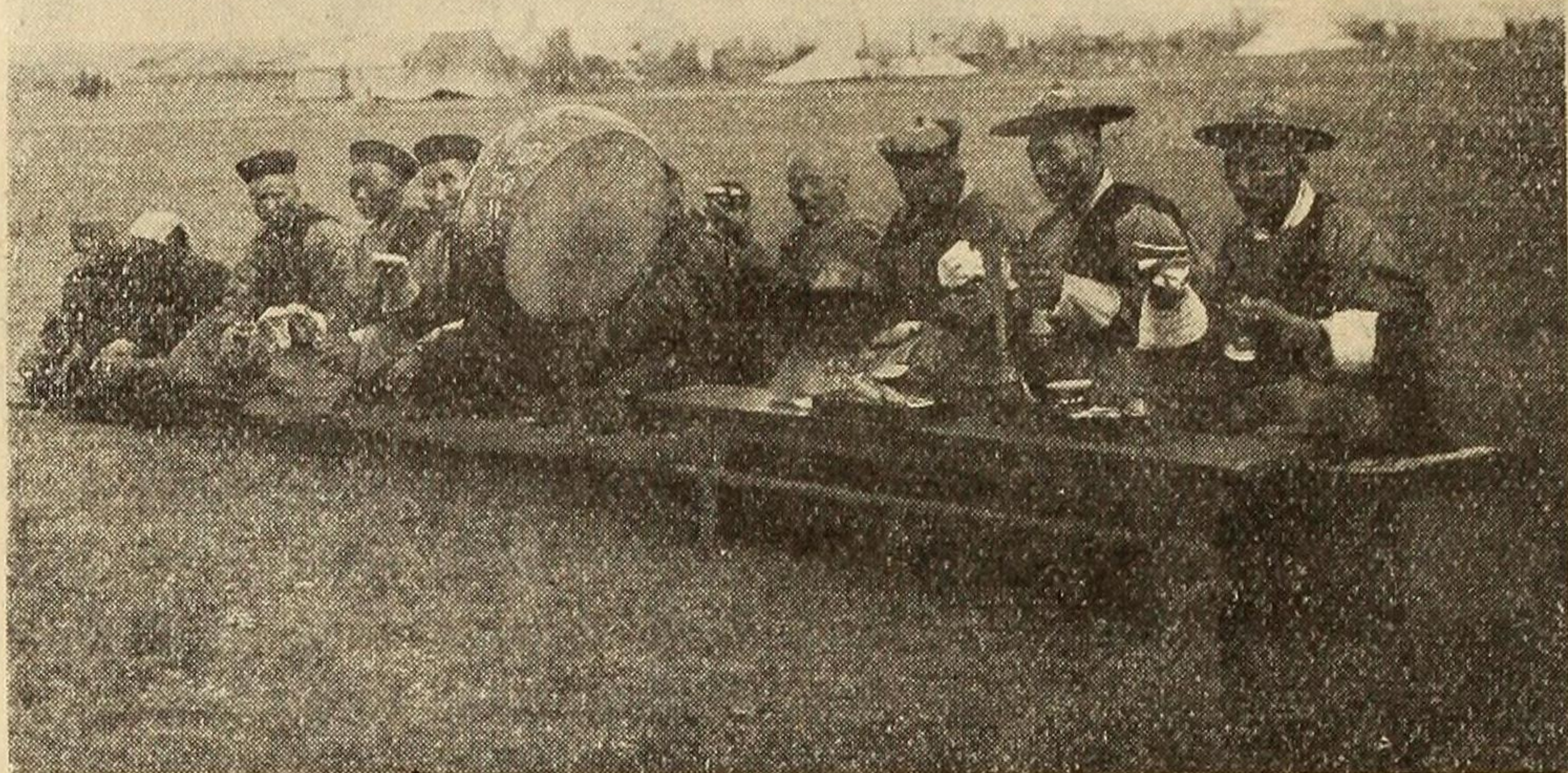
第六節 畜犬を愛する

蒙古人が家畜を熱愛することは前にも觸れておいたが、彼等は亦猛獸や盜賊の被害を防ぐ爲めに番犬として、多きは數十頭、少きも四、五頭の蒙古犬を飼養して居る。主として家畜愛護の爲めの畜犬であるから、之を大切にする事は云ふ迄もない。

旅行者が輕卒に之を鞭打つたり、或は投石したりすると彼等の感情を非常に害し、甚しきは全部落民が、徒黨を組んで復讐して來る様な事態さへ惹起することがあるから、よく注意しなければならぬ。

第七節 魚を食はず、豚を養はぬ

「彼の人には魚を食ふ」と云ふ言葉は他人に對する惡口に使はれて居る位で、河川沼澤に大小無數の川魚が夥しく棲息して居るけれども絶対に之を食はないのが彼等の習慣である。だから、如何に間違つても、蒙古人の前で生魚を食べると云ふ様なことは絶対に避けねばならぬ。



喇 嘛 の 讀 經

豚は祭天の式典の際、其の首級を天に投げ上げるのに用ひるが、食用には供しないから、之を飼育して居るのは殆ど見うけない。

第八節 土地を掘りかへさぬ

喇嘛教の教典に「鋤を以て土中の蠕虫ミズを切斷するは冥福を得る途に非ず」と云ふ一句があるが、蒙古人は之を無條件に信じて居て、土地を掘ると云ふことを非常な罪惡のやうに考へて居る。

従つて農耕をしないのは勿論、土工作業等も一切之を肯じないのが常である。庫倫クーロン北方には

地味頗る肥沃なる土地があつて、此處に約五萬の農民が集まつて居るが、之等は何れ

も漢人である。恰克圖^{キヤクト}東方イロ河流域の金鑛に働いて居る鑛夫中にも一名の蒙古人すら見出だせなかつた。

内蒙古には支那化して居る者が相當數に上つて居るから、一概に云ふことは出來ないが、之等の者に對してさへも、土地を掘ることを強要するのは考へものである。吾々から見れば洵に笑ふ可き、又不自由極まる戒律ではあるが、彼等は眞面目で之を信じて居るのであるから、一舉にして彼等の此の觀念を芟除することは頗る困難且つ危険であると思はれる。

第九節 商人を敵視する

蒙古語で商人と云ふ言葉は「ホダルダ」と云ふが、「ホダルダ」は亦嘘つきと云ふ意味をも有して居る。斯様な位であるから、商人を輕蔑するの念は非常に深刻で、之と隣り合はせに住むことは勿論、同一部落に住むことすら快しとしない有様である。

何故、こんなに商人を憎惡、輕蔑するかと云ふに、その原因は清朝以來多數の漢人

商人が入り込み、蒙古人が愚昧で、數理的觀念のないのを奇貨として、凡る欺瞞を行ひ、暴利を貪つた爲めであつて、彼等は商賣と云ふものはごまかす仕事だと思ひ込まされてしまつたのである。

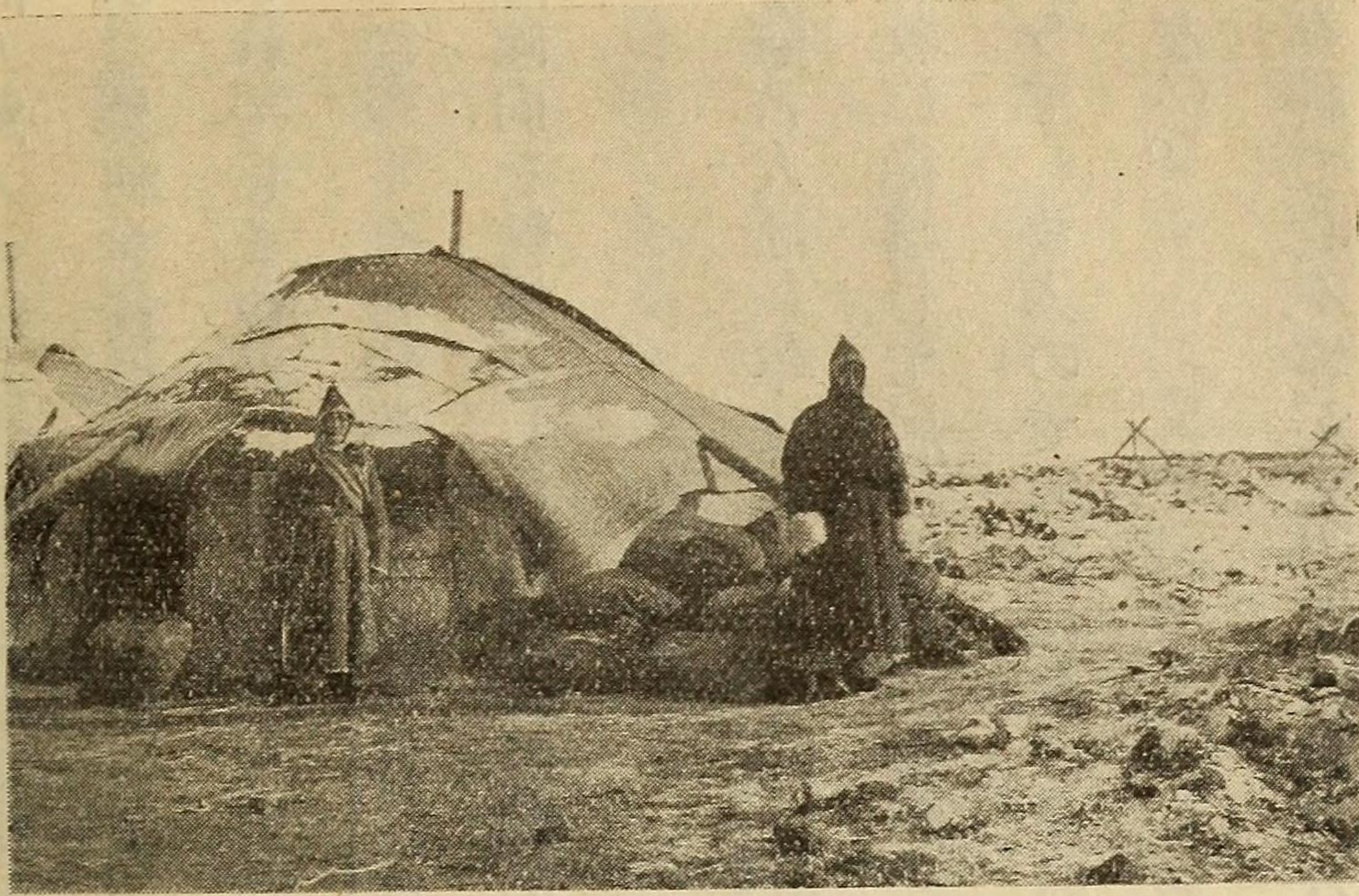
従つて今後、對蒙通商貿易に従事せんとする者は先づ蒙古人間に於ける此の誤つた惡傾向を轉換せしむる爲に餘程の努力を拂ふ必要があると思はれる。

第十節 草を刈らぬ

蒙古人は一年に少くも二回は其の住所をかへて、所謂水草を追つて、轉々移住し、放牧に従事して居るのであるが、冬になると牧草は枯れてしまふし、又其の上を雪が被うてしまふので家畜に食はず牧草が缺乏し、爲めに家畜は往々餓死することさへ稀でない。

それで我々等が其の慘狀を見るに見かねて、彼等に秋の内に草を刈り入れて、乾草にして保存しておいたら其の害が除けるだらうと云つて勸めると、そんな面倒なこと

が出来るものか、大切な草を刃物で刈り取るなんて以ての外のことであると云つて、



冬 の 蒙 古

どうしても承知しない。

之等も家畜が大切なら進んでやりさうなものであるが、彼等にとつては轉々移住して、雄大な大自然裡の青草を其の儘家畜に與へると云ふことが、言ひ知れぬ愉樂であるかの如く思はれ、幾分でも文化的な方法は不安な胸騒ぎを感じさせるのであらう。大自然の内に渾然と溶けあへる自然の子等の考へは、我々とは餘程異なるものであることは、此の點からでも推測し得るではないか。

第十一節 猜疑心が強い

ないやうにとめなければならぬ。



原 一 休 み

愚鈍で文化にうとい者は事物の理解が遅いか
ら、時として飛んでもない猜疑心を起こし勝ち
である。文明の利器に接したこともない蒙古人
が寫真機を向けられると銃殺でもされるのかと
驚き、測量機械を据えつけると、里程を計つ
て、土地を取り上げてしまふのであらうと誤解
し、又武器を携帯して居る者を見て、自分等を
殺しに來たのではあるまいか等と疑ふのは寧ろ
當然と云はねばならぬ。

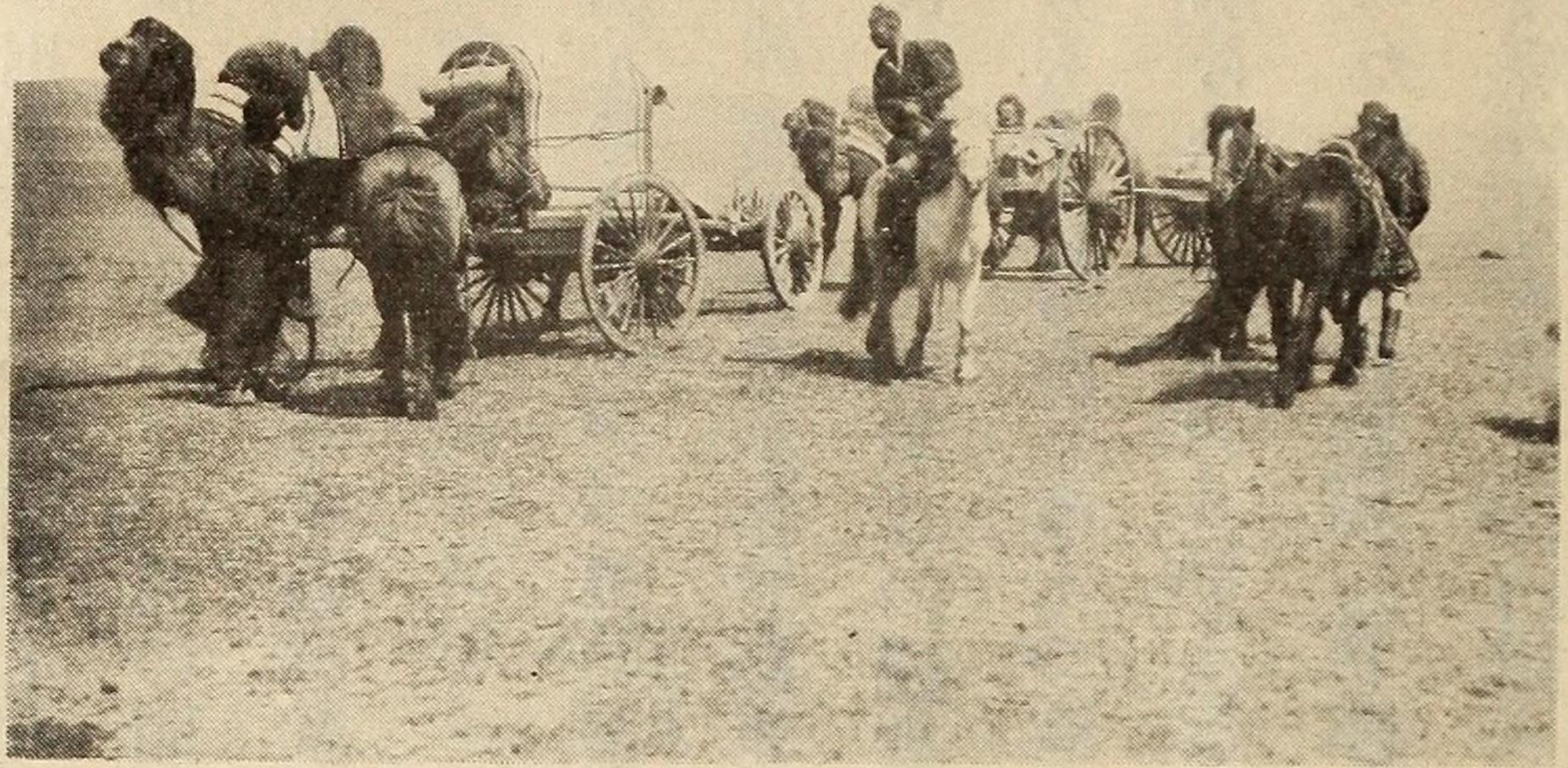
従つて蒙古人に接する場合には彼等が不思議
に思ふ様な言動をさけ、又奇怪な物は之を見せ

日本人で蒙古旅行中危禍に遇つた者に就て調べて見ると、武器を持つて居たか、金時計、萬年筆其の他の珍奇な貴重品を所持して居たか、又特に夫れ等を彼等の眼前で誇示したと云ふ様な過失があつて、之れが爲め彼等の猜疑心、恐怖、誤解を招いたことが例外なく其の原因となつて居る。

第十二節 水を大切にする

水は人畜の生活上缺くべからざるものであるにも拘らず、土を掘ることを罪惡と心得て居る蒙古人は決して井戸を掘らぬから、自然、河川沼澤を利用するの外はない。従つて彼等は水を求めては其の附近に屯して居るけれども、充分に需要を充すことは極めて困難であるから、其の水を大切にすることは吾人の想像外で、朝起きても僅かに口を漱ぐ位が關の山で、顔も洗はず、そんな餘分があれば家畜に飲ませると云つて居る。

日本人、特に都會人は惜し氣もなく水を使ふが、彼等の前でこんな風に濫費するの



今日行程の程は？

は餘程慎しまねばならぬことと思ふ。

第十三節 數理觀念に乏しい

蒙古人は甲村から乙村までの里數を訊ねると里數を以て返答しないで、手振り以示すのが常である。例へば手を上方に擧げたら、夫れは兩地點間の距離が騎馬で一日行程以上あることを示し、水平にしたら丁度一日行程、下にさげたら一日行程以下であることを表はすが如くである。斯る雜駁な表示方法をとるのは洵に不思議のやうであるが、實際は水草を追うて移動する村と村との間の距離は常に不定であるし、馬を

下駄のやうに心得て居る彼等にとつては、距離を數で示す程の正確な觀念は不要なの

である。

又唯一の財産である畜群にしても、常に動いて居る幾千、幾百の羊の群れを二人か、三人で見張つて居るのに、其の頭数を正確に數へ上げることの出來ないのは寧ろ自然であつて、時には自分の家の羊か、隣家のものか見分けのつかぬことさへ少くはないのである。

そればかりではない。一體、金錢で品物を買ふと云ふ機會の殆どない彼等は金錢の勘定も亦門外漢であるから、必要止むを得ざる場合には錢數への専門家を傭つて來ると云ふ所さへある。所が其の錢數への職業の者が二十枚か、三十枚の紙幣を勘定するのに、五分も十分もかゝつて、まるで子供がするやうな危つかしい手附で數へて居るのであるから恐れ入る。

以上述べた通りであるから、蒙古人は一般に數に對する觀念が極めて薄弱で、從つて推理、理解の力も非常に幼稚である。故に彼等に對し理論的な事柄を説きさすとす場

合には餘程上手に淳々と話さなければならぬ。

第十四節 日本人に似た性格

一概に蒙古人、支那人と呼ぶ者があるが、之れを支那人と同一視するのは非常な誤謬で、彼等は寧ろ我々日本人と同一系統の人種に屬し、亦其の性格も日本人に至極類似して居る。

例之、支那人は極めて忘恩的で、三年飼つても三日でその恩を忘れると云ふ猫のやうであるが、蒙古人は反對に恩に感ずるの性格が強く、士は己れを知る者の爲に死すとの言葉は恰も彼等の爲めに作られたかの感がある。實際、一度人の好意をうけ、世話になると、何時迄も之を忘れずに居て、常に精神的に感謝を表する點は洵に敬服に値する。

又支那人は金銭的には非常に細かく、汚いけれども、彼等は其の點極めて淡泊である。彼等の間には賭博の風もなければ、贈賄收賄の惡習もない。萬一有之とするなら

ば、それは必ず漢人の感化をうけた連中である。

その他蒙古人は非常に友情に篤く、氣分もさつぱりして居り、支那流のまはりくどい言ひまはしを嫌ひ、露骨に其の意思を表示する。

斯様な性質であるから、こちらが不人情のことでもすれば、非常に憤慨して、激しい敵意を示すのが常であるが、信義を以て接すれば、洵に温情ある交際が永續される。要するに蒙古人は之を敵にまはせば手剛き強敵であり、之を味方にすれば此の上もなく信頼し得る良友である。

第七章 外蒙の現状

第一節 外蒙共和國政府の組織

國務總理（初代組織者）

（第二代）

ソクバートル

チエリンドルジ

(第三代)

アムール

(第四代)

ダンパドルジ

(第五代)二名

ケントン

イトンスール

副 總 理

二 名

内務、外交、陸軍、財政、教育、司法、參謀、農商、各總長

一 名

内防處長「ゲーパーウー」(國民保安部)

一 名

中央執行委員長

一 名

國民議會會長

一 名

國 民 黨

青 年 革 命 黨

蒙古國民中央購買組合長(コーペラティブ)

一 名

駐莫斯科代表

烏里雅斯臺長官

科布多長官

一 名
一 名
一 名

之に依つても知らるゝ如く、政府の組織は全くソヴェートに則り、表面上の政府當局は蒙古人であるが、要部にあつて、裏面より監視操縦するものは莫斯科派遣の露人と親露系ブリヤート人官吏で、絶大なる權力を有し、重要政務は合議制で決定する規定になつて居るが、有名無實であつて、事實は蘇國系が完全に掌握して居る。特に内防處は獨立の特權を與へられ、他よりの干渉を受けることなく、憲兵、警察、司法、執行の權力を有し、人民から鬼の様に恐れられて居る。

日本通としては、ダンツン、ナムサライ、ゴンポバトマジヤツブ、プトカン等が居り、先に日本士官學校を卒業した^{パプチャプ}巴布札布の遺子川島義雄及び、ジョンジュルジャツプ、早稻田大學卒業の敖林泰、郭首、甫等も各方面で活動して居る。

先年我が滿鐵調査隊の一行が誤まつて外蒙境域に入り、ユクジウル廟で危ふく殺害されやうとした際の如き、全く川島義雄、敖林泰兩氏の好意で、無事なるを得たのであつた。

第二節 教育

外蒙政府の對内政策中眼目と稱するものが三項ある。即ち兵備、經濟、教育が之であつて、特に人材の缺乏を痛感し、八年制の義務教育を實施し、宣傳隊を派遣して映画、演劇、新聞、傳單等凡る手段を通じて教化に務めつゝあるの外、莫斯科其他西比利亞各地に留學生を派遣し、遠く獨逸にも約三十名の留學生を送つて居る。

庫倫附近に於ける教育施設は左の如くである。

| | | | |
|---------|---|-----|-------|
| 一、國民小學校 | 二 | 收容數 | 二百五十名 |
|---------|---|-----|-------|

外に各地に三十一校を有す。

| | | |
|---------|---|-----|
| 一、國民中學校 | 一 | 八十名 |
|---------|---|-----|

- 一、國民大學校 一 (法、文、天文三科) 三十五名
- 一、補習學校 一 六十名
- 一、士官學校 一 (三ヶ年修業) 百五十名
- 一、宣傳學校 一 三百名

宣傳學校に收容されて居る者は男女、既未婚を通じ、年齢を問はず、十四歳より四十歳の人々である。修業年限は速成科三年、本科五年とし、在學中は全員を寄宿舎に入れ、食費、被服其他一切官費支辨である。卒業後は所定の宣傳作業に従事させることになつて居る。内蒙よりの留學生の如きは殆ど全員當校に入學させて居る。校規は頗る嚴肅で、日曜でさへ外出を許されない。

- 一、飛行學校 一

第三節 交通

共和國政府成立以來、各都市間に電信路線を架設し、特に露蒙國境方面に於て完璧

を期し、又支蒙國境方面は警備線の連絡に努力しつゝある。庫倫クーロン、莫斯科間には無線電信及び航空輸送の設備を有し、又自動車も著るしく増加して目下五百臺に上つて居る。

鐵道は蘇國の投資に依つて敷設する計畫で、其の一部恰克圖ギヤクト、庫倫クーロン、滂江鐵道は、中央執行委員長ダンバドルジ、蘇國技術委員會全權ウラムニフ並クキスキーの間に打合せた密約に依つて、鐵道を擔保として、蘇國より一億元を支出し、其工事を開始し、大部分は既に完成するに至つた。

第四節 軍 備

外蒙共和國政府が混沌たる從來の支那式軍隊を改造して、政府の統率下に動く兵備を完成したのは、要するに同政府政策の一主眼たる兵備の充實を期すると共に、外蒙今日の獨立的面目を完ふした所以であつて、一顧の價值ある點である。

同政府は大正十三年の革命が完成するや、蘇國の現制に依つて徵兵制度を設定し、

滿二十一歳に達したる者より徴兵し、四十歳迄兵役義務に服せしめ、各兵科は現役三ヶ年である。

一師團は平時常員三千とし、目下騎兵師團四がある。各師團には三中隊よりなる騎砲兵一大隊を有し、師團司令部は庫倫クーロン、烏里耶蘇臺ウリヤスダイ（一部は科布多コブトに分駐）、桑貝子サンペイツ、西庫倫クイロンにあり、此れより各々國境に分派して警備に任せしめて居る。教育訓練は蘇國より派遣された露人及ブリヤート人教官擔任し、兵員中成績良好のものは、士官學校に入校せしめ、更に良好な者は莫斯科の陸軍大學校に送つて居るが、現在約二十名が同校に學んで居る。

軍隊の服裝及び兵器は蘇國の援助に依つて整備されて居るので、全く露式で一見赤軍と見誤る程である。

右の外、蘇軍騎兵の庫倫クーロンにあるもの一中隊、支蒙國境、即ち内外蒙古境界線に散在するもの約一中隊がある。

蒙古軍隊は其の兵員従順で、絶対に上長の命令に服従し、常に黙々として、勞苦を忍び、不平倦怠の色を示さざるを美點とする。徒歩の際は誠に愚鈍のやうであるが、一旦馬上の人となれば頗る敏捷勇敢にして、彈丸雨飛の間も從容自若として恐れない。此れ五、六歳の幼少より裸馬に鞭打つて廣野に狩する習慣と、祖先傳來の血統の然らしむる處であつて、不節制な支那軍や赤軍の到底及ぶ所でない。唯々其の徒歩に慣れないのと、迷信深いのは大きな缺陷と稱することが出来る。

第五節 金 融

金融機關としては蘇國の極東銀行支店と、外蒙國立蒙古實業銀行とがあつて、各地に支店網を張つて居る。流通貨幣は蘇國發行の紙幣及び銀、銅貨、支那の弗銀貨であつて、外蒙政府自身も銀貨及び銅貨を鑄造しつゝある。

外蒙政府の歲出入は年約一千萬弗で、百弗以上を國外に持ち出すことは禁止されて居る。

中央購買組合即ちコーペラティブは政府の一機關で、設立以來逐次業務の盛大を來し、今や國內のみならず、哈爾濱、滿洲里、張家口、天津、トロイツコサウスクキヤクト（恰克圖北側）等に代理店を設置し、單に内地商業だけではなく、外國貿易の大部分をも獨占するに至つて居る。此の中央購買組合が設立されてからは、從來隆盛を極めた支那人の個人商業も、壓迫と重税との爲に火の消えた様に衰退し、盛時には十萬を算した移住民も最近には三萬にも達せず、やがて遠からずして外蒙古内には其の影を失ふに至るであらうと觀測されて居る。而も之れが爲めに對支貿易は極度の不振に陥り、今や輸出入の四分の三は露國の獨占する所となつてしまつた。

中央購買組合は斯くして全く露人が其の實權を握つて居り、従つて國內商業も亦蘇國の支配下にあるものと見なければならぬ。

外蒙古内に於ける各種工業も從來は支那人の手にあつたが、共和政府の出現と共に、苛酷な法律を制定して之を壓迫し、別に政府直營の酒精工場、皮革工場等を設立し、

今日では支那人の個人工業も殆ど没落してしまつた現状である。

第六節 鎖國せる外蒙と其の對日態度

我が滿鐵調査隊一行が一步外蒙境界内に足を踏み入るゝや、ユクジウル廟に於て外蒙軍隊の爲めに捕へられ、百五十日間殆んど死に勝るの苦楚を嘗め、此の間露人は屢蒙古人を煽動して之を殺害せしめんとしたが、親日蒙人の盡力に依つて漸く生命を全ふし、辛ふじて虎口を脱して、無事張家口に歸還したのは大正十四年末の出來事であつた。

外蒙は斯くの如く其の邊境到る處に軍隊を配置し、露人監視員が之れを監視干渉して居るが、之は勿論蘇國政府の指金であつて、過度期に於ける外蒙經營の秘密漏洩を恐れ、又外國の經濟的勢力の侵入を忌んで居ることは忖度に難くない。支那商人は特に彼等の敵視する處であつて、其の出入には煩雜なる手續きを強ひ、商品には禁止的重税を賦課するのみならず、居住營業にして悉く課税の種子とならぬものはないの

で、流石老獺なる支那商人も手も足も出せない状態にある。

張家口在住の米人藍金洋行主ランソンの如きも、張家口、庫倫間の貿易を經營する爲め、庫倫に事務所を建築し、商品を仕入れた處、外蒙官憲から露骨な干涉壓迫を受け、殊にランソンが主要目的とした馬匹の輸出を禁止せられ、已むなく建物商品一切を捨値の七萬五千弗で外蒙政府に賣却して引揚げたが如き、外商壓迫の顯著なる一例であつて、その他三、四名の英米獨人等も最後まで奮闘したが遂に彼と同様の運命に遭つた。之れを以ても一斑を知り得るが如く、今日庫倫に在る外商は露支人以外は若干の土耳其人、希臘人のみで、中央購買組合の壓迫の下に何れも重税を課せられ、汲々たる有様である。

日本人は大正七年頃迄は庫倫、恰克圖に各々二十數名在住し、三井洋行の支店まで設けられて居たが、大正九年末、日本軍の後貝加爾撤退により恰克圖附近を先づ引揚げ、次で大正十年バロン・ウンゲル軍の入庫と共に庫倫を引揚げ、同軍に従軍して居

た畠山以下二十數名の義勇兵も或ひは撤退し、或ひは殺害されてしまつた。

其の後大正十二年兒島岩太郎なる人、滿洲里より庫倫クーロンに至つて醫師を開業したが、昭和五年に歸國した。此の間莫斯科より故片山潜及び同類三名、外に張家口在住盛島角房氏相前後して入庫したことがある位で、目下外蒙には一名の日本人も居ない。

兒島岩太郎氏が庫倫クーロンで病院を經營したのは全く例外で、彼も亦六ヶ月間は入獄を免れなかつたのである。

乍併、バロン・ウンゲル軍に日本人の混つて居たのは日本政府の使嗾によるものだと云ふ蘇國側の宣傳も今日では外蒙人の爲めに一笑に附せられ、彼等の間には寧ろ日本に倚賴せよとの意見頻發し、特に同人種中の文明國、強國として尊敬して居る。我が滿鐵調査隊一行に對しても、兒島醫師に對しても、露人の要求を斥けて、遂に之を生還せしめたやうな事實、又大正十五年蘇國留學を中止して日本に送らんとし、三十名將に渡日せんとしたが、蘇國側の反對により已むなく之を獨逸に送つたやうな事

實、何れも蒙古人の胸底を流るゝ眞の感情を察知し居るに足るであらう。現に恰克圖ギヤクト長官及び内防處長が前記盛島氏に對して、「決して日本人の入蒙を禁止して居るのではない。適法の手續きを踏めば護照を交附しやう」と公言して居る事實に依ても彼等の好日感情は明らかにうかゞひ得るのである。

斯かる傾向に對して、露國人が猜疑心を抱くのは當然の歸結で、今や蘇國は百方手段を盡して、外蒙人を懐柔し、其の間經濟的、思想的の征服を完成せんと努力しつつある。従つて、斯くの如き蘇國の企圖が實現されるまでは、當分國境開放と云ふことは實現されぬであらうと考へられる。

結 び——善隣協會の意義と目的

以上述べた所に依り、讀者諸君は大體蒙古とはどんな處か、蒙古人とは如何なる人種かを理解されたことゝ信ずる。

我々は東洋の盟主として、此の善隣を如何に視、如何に扱ひ、如何に指導撫育したらよいか。此處に簡單ながら吾人の主張を述べて、大方の賛同を得たいと思ふ。

あの大自然の内に悠々自適して居る四百萬の蒙古民族、之を此の弱肉強食の舞臺裡に放置しておくことは、恰も鯉節を野良猫の眼前に置いて省みざるに均しい。恐らく北は蘇國の爲めに蹂躪せられ、南は漢人の爲めに同化去勢せられて、あた^{チンギス}成吉思汗の後裔も七百年の悲慘なる歴史を殘して、壞滅の外なきに至るは必定である。今日黄色人種が白色人種に常に劣等視されて居るのは、東洋の中心に帶狀をなして棲息して居る喇嘛教國、回々教國、印度教國が時世に遅れ、文化に遠ざかり、寧ろ第三國の貪慾なる政争の餌となつて居るからである。

是等の諸國の民族は東洋の牙城たり、皇國の藩壁たるものである。東洋に於ける盟主たる皇國は東洋平和の爲めに、相互共榮の爲めに、何としても之等の強化發達を圖らねばならぬ。

三千萬民衆の渴望による滿洲國の出現は、極東の一角に於ける黄色人種の覺醒であり、光明である。

此の次ぎはどうしても蒙古民族が蹶起せねばならぬ。喇嘛教國である蒙古民族、西藏民族が世界的時流と其の眞唯中に於ける自分等の地位とをはつきりと認識して、其の民族的再建に努力するとき、茲にはじめて東洋の曙光は現れるのである。

皇國は某々國等の如く他國の領土を侵略しやう等との野望は斷じて持つて居らぬ。強きも、弱きも、大なるも、小なるも、富めるも、貧しきも大同團結して、暖かき手を握り合ひつゝ王道の實現を圖るところ、其の最大唯一なる念願なのである。萬國に卓越せる皇道を先づ東洋に宣布し、進んで世界人類をして仰いで、以て平和を招來せしむる如く努力することは今日生を倖ひにして皇國に享けたる者の天賦の使命である。

我々は以上述べた所に従つて、東洋平和の確立、皇道宣布の大業は先づ第一に蒙古

民族の覺醒蹶起に存することを知る。而もその蒙古民族が如何なる立場に在るかを考へるならば何人か之に對して一掬の涙を濺ぎ、可憐なる彼等の爲めに圖らんとするを肯ぜざる者があらうか。

此の點に於て吾人は我が善隣協會の意義と目的とを是非共有識者諸君に知つて戴きたいと思ふ。

事實、善隣協會は眞に蒙古並に蒙古民族を理解し、彼等の心からの良友となつて、其の蹶起覺醒を促す唯一の具體的運動機關である。此の種の運動は從來より當然起るべくして、起らなかつたもので、今漸く機運迫つて、一刻も猶豫すべからざるに至つて誕生した。

本協會當初に於ける事業は

(一) 内地に於ては東京に本部を、大阪に支部を置き

(1) 蒙古事情の紹介宣傳

- (2) 蒙古留學生の指導援助
- (3) 附屬研究所並に圖書館の經營
- (4) 蒙古に關する調査研究の發表

(二) 外地に於ては新京に事務所を、蒙古要地に所要の機關を配置し

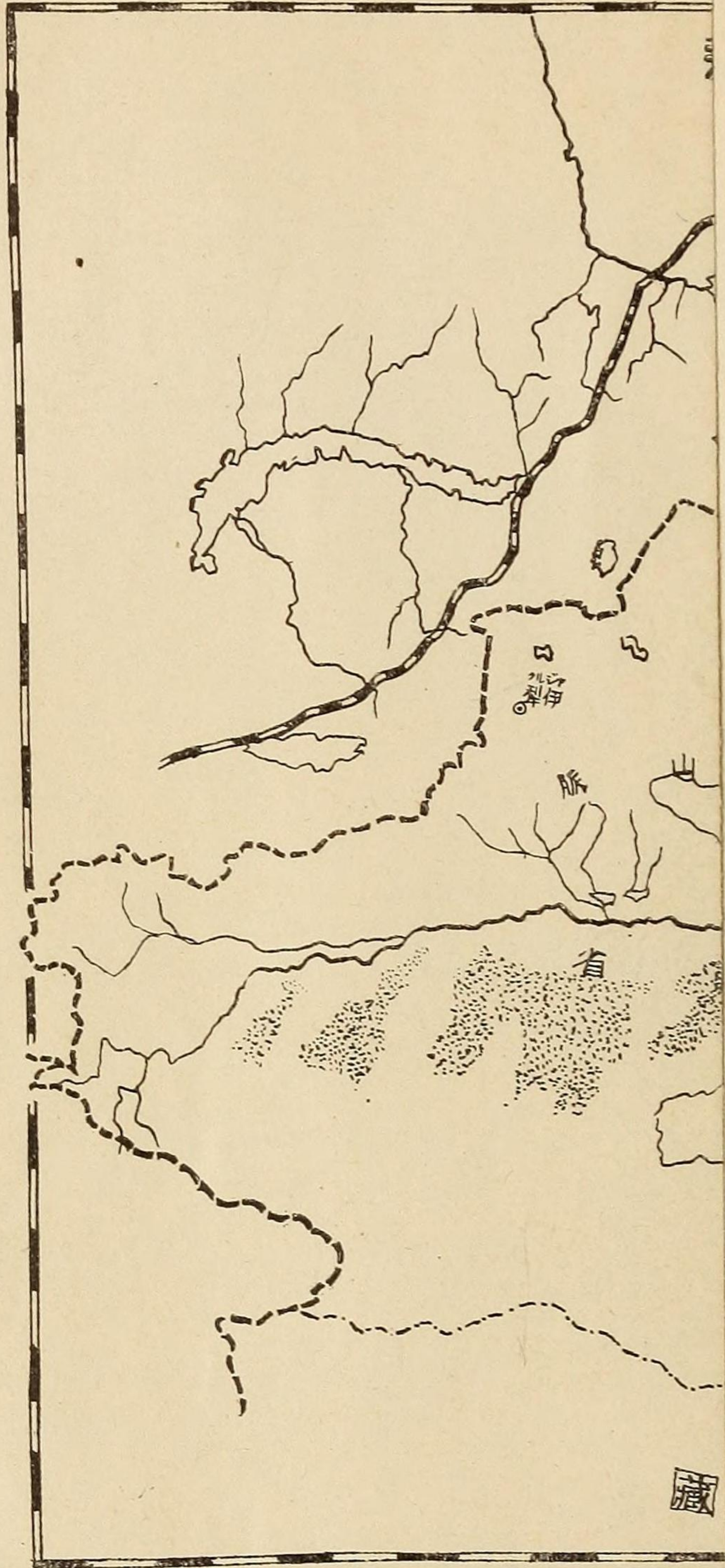
- (1) 蒙古民族に對する文化宣傳
- (2) 診療所の開設並に巡回診療の實施
- (3) 蒙古人子弟の教育
- (4) 蒙古の産業開發並に通商の促進指導
- (5) 蒙古の資源及び物資の調査
- (6) 日本事情の紹介

等を主なるものとして居る。我々は蒙古民族の蹶起、東洋平和の確立、皇道の宣揚——此の三位一體の大業完成への熱意の下に、此の廣汎、多岐なる事業に當らんとす

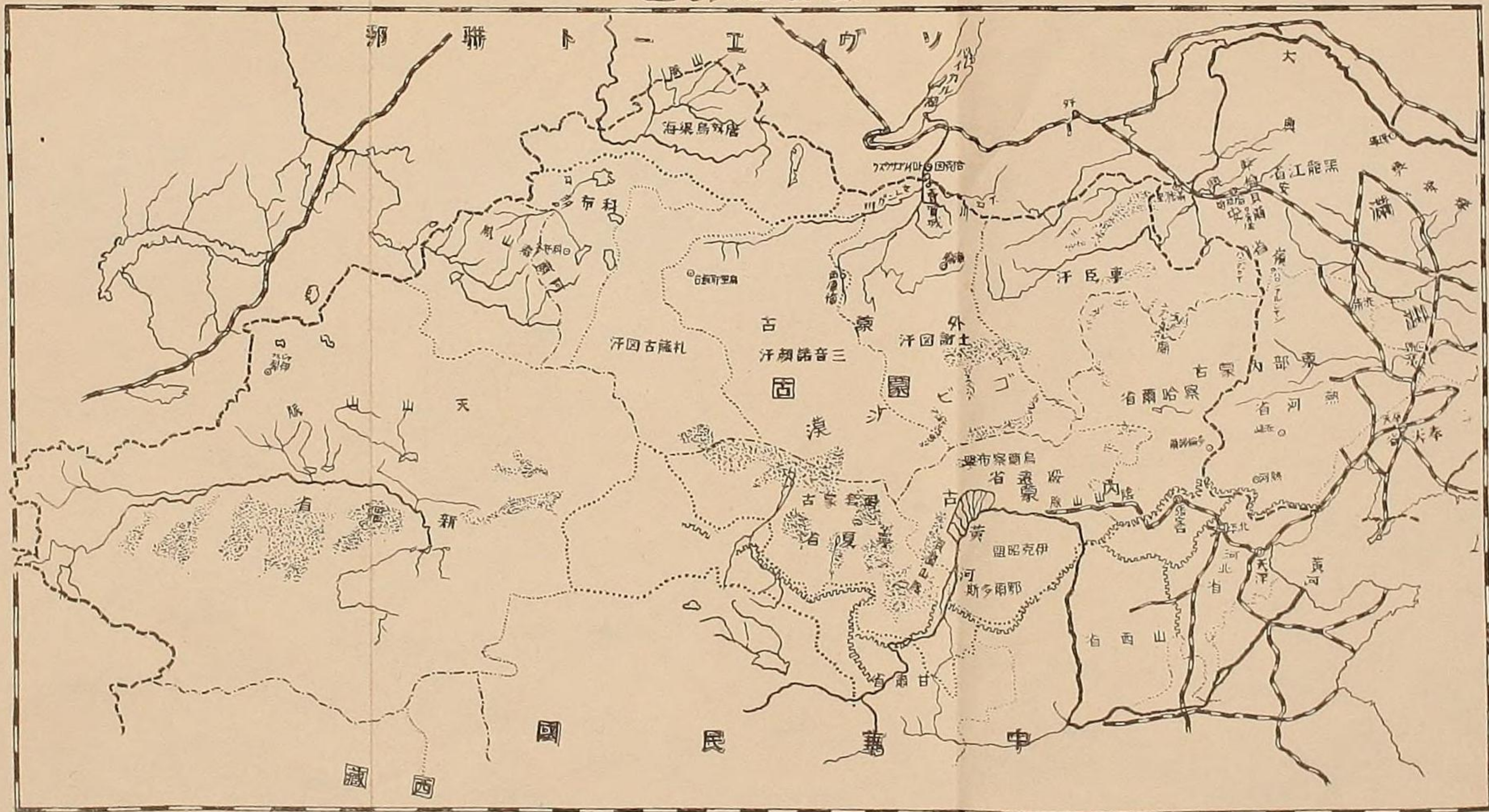
るもので、誠に責任の重且大なることを痛感せざるを得ない。而も斯くの如き事業は獨り協會の微力のみを以てしては到底成し遂ぐるを得ない。我が國民諸君の熱誠なる援助あつて、始めて意義ある成果を残し得べきものである。

吾人は九千萬國民諸君の一人々々が蒙古の問題に就いて正しき認識を持ち、我等の運動に熱烈なる支援を與へられんことを、衷心より希望して、此の稿を終るものである。

(大 尾)



蒙古地勢圖



290
150

昭和九年一月二十五日印刷
昭和九年一月三十日發行

定價金二十錢
送料金四錢

蒙古とほとんどこか

(不許複製)

著者兼
發行者

東京市澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二番地
財團法人 善隣協會
代表者 吉村 忠三

印刷者

東京市神田區和泉町一番地十號
竹内 健治

印刷所

東京市神田區和泉町一番地十號
文聖舍

東京市澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二番地

發行所

財團法人 善隣協會

電話青山 (36) 二二八三番

Faint, illegible markings or text at the top of the page, possibly bleed-through from the reverse side.



96950

LC ACQUISITIONS



0 040 898 152 9

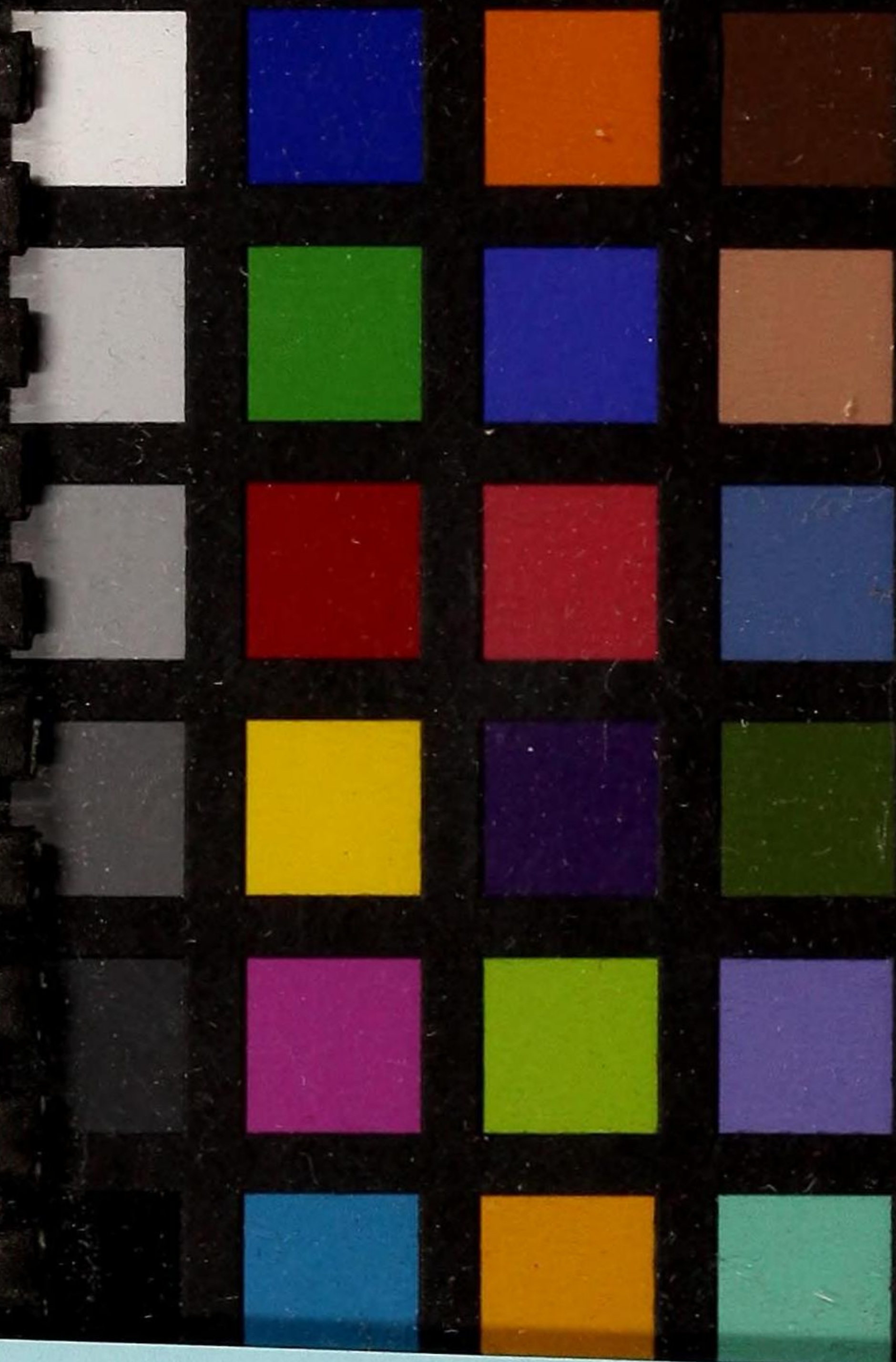
Handwritten text in Arabic script, including a title 'العلماء الكبار' and a list of names and dates.



العلماء الكبار

Перектор П. Дамилор.

Handwritten text in Arabic script, likely a list of names and dates, possibly related to the scholars mentioned in the title.



Mōko to wa donna tokoro ka

880-04 Zenrin Kyōkai

5009480

Library of Congress, Asian Division

[76] mokotowadonnatok008800

00408981529

Nov 08, 2013